

物が寒冷化の気候条件で堆積したと考えられ、この時に微細な粘土粒子も入江に堆積する状態で形成されたと考えられる。

この亜炭層を上下する粘土層は、第11図に示した様に、現在窯跡群が集中する地区に主体分布が看取される。このことから、乗附古窯跡群の製品と秋間古窯跡群の製品の質感が類似する一群の存在は、この地質的原因が想定出来る。

又、乗附古窯跡群の製品で、焼き締ったものは、東海地域の製品と区別し難いのは、このことによる要因も考慮されよう。

第12図は、安中市域の地質が1/25,000の地形図にほぼ合致させられるのが非常に重要である。

吉井・藤岡地区の粘土に就いては、文献17及び22に詳細にわたる調査報告が記述されている。

文献17(五十嵐俊雄・藤貫 正)によれば、鮎川を境に、丘陵地と藤岡台地下に賦存する粘土は、各々の堆積成因・鉱物組成・性質が異なることが指摘されている。又、両者の地下に賦存する推定量の試算も行われている。

この報告によれば、筆者が土師神社周辺で採取した粘土試料と、緑塗地区で採取した粘土試料の分析データと合致している。

又、文献22(須藤定久・花岡敏一)によれば、文献17の調査報告を踏まえ、藤岡瓦の原料としての調査を実施し、牛伏砂岩の利用を検討している。

この両者の分析結果による報文中の含有鉱物は以下のとおりである。(①は文献17、②は文献22)

① 「山土」(鮎川上位段丘下に賦存する粘土)は、montmorillonite(モンモリロン石)・quartz(石英)・albite(曹長石)・kaolinite(カオリナイト)・sericite(絹雲母)・pyrite(黄鉄鉱)(後二者は、泥岩中の鉱物)

「畑土」(藤岡台地下に賦存する粘土)は、quartz(石英)・chlorite(緑泥石)・sericite(絹雲母)・albite(曹長石)・hornblend(普通角閃石)

② 「山土」は、halloysite(ハロイサイト)・quartz(石英)・christbalite(クリストバライト)・feldspar(長石)

「牛伏砂岩」は、quartz(石英)・kaolinite(カオリン)・sericite(絹雲母)・calcite(方解石)

尚、この両者のX線回折チャートは第15図に示した。

然し、後者(文献22)の「山土」の回折チャートを判定すると、 2θ 21.9~22.0での反応に就いて、報告では christbalite(クリストバライト)とあるが、寧ろ、feldspar(長石)か plagioclase(斜長石)と判定されるものと考えられる。又、 2θ 12.4では chlorite(緑泥石)やこのほか、montmorillonite・mica乃至 sericite・pyrite等の含有が認められ、文献17とはほぼ同一の鉱物組成が認められる。

そして、「山土」「畑土」での両者間の鉱物組成の相違には、「山土」には pyrite(黄鉄鉱)が特徴的で、chlorite(緑泥石)は全体的に少ないが、「畑土」ではこの chlorite(緑泥石)が特徴的で、

このほか、sericite (絹雲母) (mica=雲母) の含有が高い点も「畑土」の特徴と判断される。

この「山土」・「畑土」の賦存状態は文献17・22の両者で推定が行なわれている。第13・14図は、両者の添図を元に筆者の加除筆を加え再図化したものである。

図中でスクリーントーンで示した部分が両文献で示された部分である。唯し、第14図で注意しなければならないのが「畑土」の分布域で、トーン部の帯状が分布域ではなく、トーン部より内側の市街化域が推定された分布域である。

然し、筆者が同地域を踏査した結果、両者の推定分布域よりも更に広域に分布することが確認出来た。この分布域の確認は、部分的な切り通しや、工事の掘削箇所、発掘調査現場等地下の状況が観察出来る部分全てや、地元での聞き取り調査等を行ない確認した。

この結果、両報告で抜けていた竹沼地区や本郷地区等、古代の窯跡が立地する箇所全てに近い所に粘土の賦存が観察出来ている。又、藤岡古窯跡群と称する地域には、最大3種の粘土が賦存することが明らかに出来た。この3種は次のとおりであるが、内、1種類は、吉井古窯跡と重複する。この点は、前節でも述べたとおりである。

A 「山土」を主体とするが、粘土化したローム土等上落合・竹沼・西平井地区に賦存する粘土。

montmorillonite (モンモリロナイト)・halloysite (ハロサイト)・pyrite (黄鉄鉱) が特徴的な組成鉱物である。

B 「畑土」、chlorite (緑泥石)・sericite (絹雲母) 乃至 mica (雲母) が特徴的な組成鉱物である。

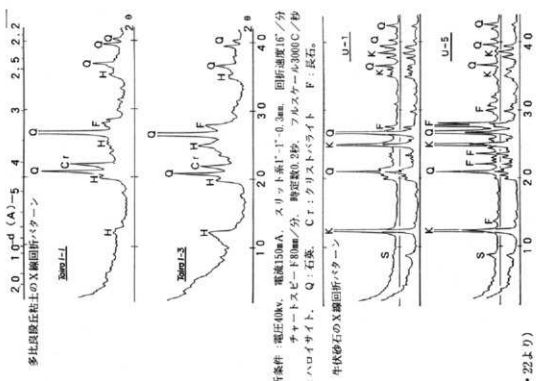
C 名称無し、牛伏山南麓から金山南麓に賦存、未分析であるが、恐らく chlorite (緑泥石) を多量に含有し、talc (滑石) の含有も見込まれる。(藤岡古窯跡群鉾沢支群の主要生地土)

この3者が藤岡古窯跡群の使用した粘土に疑定されるものの、Aに就いては、今後検討の余地がある。

これら3種の粘土は、未焼成の状態であって、直接的に土器胎土の回折チャートや元素組成と対比し得ない。この点を考慮し、筆者が採取している粘土の中で、土師器の胎土に近似すると考えられる生地土 (竹沼採取) を未焼成の状態と、同試料を電気炉を用い、1000°Cで1時間焼成したものと、土師器3点の合計5試料をX線分析を行い、鉱物組成を回折チャート化し第16図に図化した。

又、対比試料として、胎分No963 (富士見村米野採取甲種粘土)・胎分No964・965 (高崎市山名町金井沢採取粘土・シルト) (板鼻層) を併載した。

この5試料のチャートを見る範囲に於いて、土器では mullite (ムライト)・christobalite (クリストバライト) は生成している。胎分No962粘土では、「山土」の既存回折チャートと大きな変化は認められないが、同試料の焼成物では、2θ19.5度付近の所謂「カオリン鉱物群」が減少している点と、mullite (ムライト)・christobalite (クリストバライト) の生成が認められる。この点



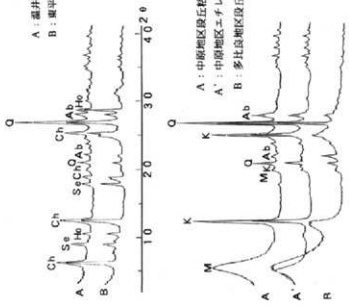
多比良段丘粘土のX線回折パターン

年状砂石のX線回折パターン

回折条件：電圧40kV、電流150mA、スリット系1°-1°-0.3mm、回折速度16°/分
 チャートスピード80mm/分、測定数0.2秒、フルスケール3000C/秒
 H：ハロワサイト、Q：石英、Cr：クリスタロバライト F：長石

A：福井地区礫層粘土
 B：重平井地区粘土（畑土）

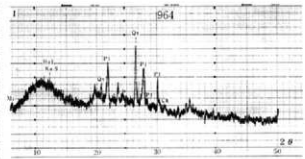
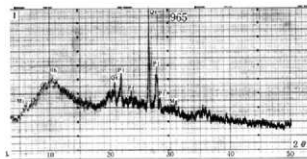
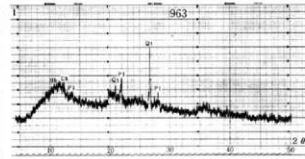
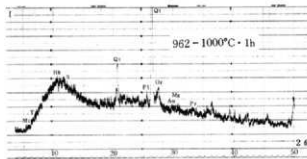
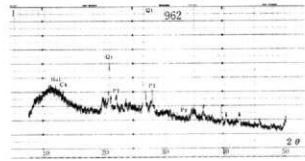
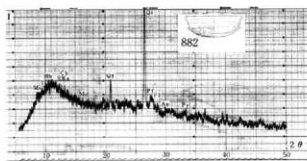
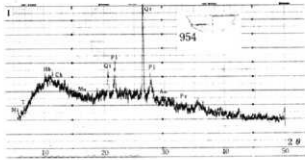
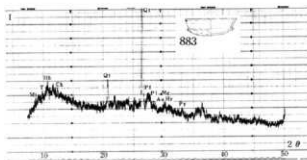
A：中原地区段丘粘土
 A'：中原地区エチレンジグリコール
 B：多比良地区段丘粘土



Q：石英 Ab：曹長石 Or：角閃石 Ho：角閃石 Py：黒鉄鉱 Cal：方解石
 Ch：緑泥石 Se：セリサイト K：カオリン M：モンモリロン石

左図は、五十嵐信雄・藤貫 正 昭和56年（1981）文獻17による。
 右図は、須藤延久・花園誠一 昭和59年（1984）文獻22による。

第16図 山土・畑土X線回折チャート図（文獻17・22より）



第17図 工試分析・土器(土師器)・粘土X線回析図

X線回析の測定条件

一群馬場工業試験場 小沢達樹

試料 供試料を振動ミル粉砕機により10mm以下に粉砕し、5~10gを油圧プレス機を用いて径4cmの円板状に成型して使用した。

分析装置 島津製作所機 XD3A型

測定条件

ターゲット Cu・スキヤニングスピード 2°/min・フィルターNi チャートスピード 2cm/ms・電圧 30kV 20mA・Fライビングスリット 1'レシービングスリット 0.1mm・カウントフルスケール 0.5C/S・計数時間 1sec胎分962の焼成実験は小沢達樹氏による。

では、胎分№883等の土師器の焼成温度を示唆するであろう。詳細に就いては、筆者自身の能力不足で言及し得ないが、チャートの波形は藤岡産としている土師器の回折チャートと鉱物・d値共にほぼ同一の状態である。詳細に就いては今後に託したい。

胎分№964・965では、964で2θ12.3度・19.5度・35.0度で kaolin (カオリン) と考えられる反応が見られるが、12.4度付近では serpentinite (蛇紋石) の反応とも考えられるが、全体的な波形の状態は、「山土」に類似している点が指摘出来、秋間古窯跡群中で採取している粘土とも共通性が認められるところである。これらの共通性は、板鼻層・秋間層(高崎層)の特徴として理解されるのかも知れない。今後の検討課題の一つとしたい。

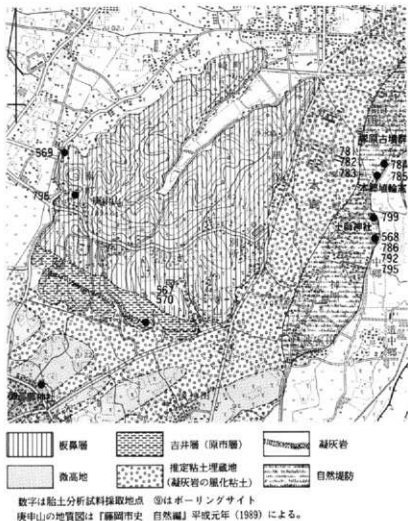
藤岡「畑土」に就いて

藤岡「畑土」は、藤岡台地下に賦存する第四紀水性堆積粘土である。この「畑土」の利用は、近くは、江戸時代後期に焼造が開始された。棧瓦・今戸焼があり、瓦の製造は今日迄続くが、今では吉井町での砂利採取場の廃泥利用により「藤岡瓦」胎土は大きく変化した。

筆者は県下の明治・大正期の「藤岡瓦」を観察する機会を得て詳細に観察した。この結果は、第2分冊中に記述してある。この「藤岡瓦」の胎土は、以前よりの関心事であった土師器の胎土に類似する点に注意が引かれた。これは、西毛地区の土師器の胎土には、片岩系の夾雑物や、微粒の雲母と考えられるパールラスター光沢状鉱物の含有があることを知っていた為であった。そして、「藤岡瓦」の断面には、このパールラスター光沢状の鉱物が多く含まれていることが観察の結果明らかになった。このことは、筆者にとっては、土師器の生産地を特定することが可能であろうことが強く感ぜられ、望外な喜びでもあった。又、片岩系の夾雑物からは、吉井・藤岡古窯跡群地帯に土師器の主体生産があろうことが予測出来ていた為、併せて土師器の主体的生産地という朱印を藤岡=緑野郡に押すことが可能になった。そして、この事以前より藤岡市域で採集していた土師器片等を再び観察し直すことにより、夾雑物以外での判定要件が把握出来た。

この「畑土」の堆積要因は、新井房夫氏(文献4)により推定がなされ、現在ではほぼ通説化している。この新井房夫氏の説によれば、烏川の流路変更に伴い、鍋川・鮎川等は河川営力に大きな影響を受け、藤岡台地は、半ば湖沼化した状態となり停滞水域化し、これにより鮎川の営力によって粘土物質の堆積が行われたものと指摘している。

筆者は、この説の観点である「停滞水域による湖沼化」という点から、「畑土」は通常の湖成層的な状態と思い込んでいた。然し、藤岡市街地及び周辺部に於いて、工事現場・発掘調査現場・切り通し等地下の状態が観察可能な地点を踏査した結果、粘土の堆積が確認出来るのは、小規模な旧河川流路に於いてのみであった。そして、この旧河川流路の状況から、鮎川・鍋川による河川営力によって藤岡台地の基盤が形成され、その後、鍋川の段丘形成により鮎川の流路が日野金井付近から網状の流路となり、直後に烏川の流路変更が起き、藤岡台地では停滞水域乃至湿潤な地域となり、後背湿地が発達し、旧流路部分に日野金井より上流の鈿沢等の粘土堆積時期に流出した粘土鉱物が堆積したことにより「畑土」が生成されたものと考えている。



第18図 藤岡・庚申山周辺地形・地質図

この為、鮎川上流域の三波石変成岩類の風化物が再堆積したと考えられる。これにより、「畑土」には、sericite（絹雲母）・mica（雲母）・talc（滑石）・chlorite（緑泥石）等を特徴的に含有するものと考えられる。

第18図には藤岡市内でのボーリング調査の柱状図を鮎川上流域から下流域に向かう様に再編集し、ボーリングサイトとボーリングサイト地点の標高を追記した。高、ボーリングサイトは第17図に図化した。

この柱状図からも判読出来る様に、ボーリングサイト数15に対し、粘土層を貫通したのは9地点のみである。そして、この粘土層の標高地を見る限りに於いては、地形の凹凸が著しく、現地表面高と粘土埋藏地の標高には相関関係を見出すことは出来ない。又、下位に堆積する礫層の状態も不十分な状態である。この断面での状況を、庚申山周辺の地形図（平面）で見ると、旧鮎川

の流路と言われている庚申山南面から、東面では、自然堤防様微高地の発達が顕著である。この状況から、鮎川の不安定な流路により現地地表下では複雑な地形状態になっていることが推察される。

又、庚申山周辺には、庚申山南面の地質状態から、板鼻層の風化した粘土の堆積も想定されるところである。

この藤岡「畑土」と、「畑土」乃至前段で分類したCを生地土とすると考えられる試料のX線回折チャートを第16図1～3に図示した。そして、この3者のチャートの対比資料として、第16図4～6を併載した。

これらのチャートの中で、藤岡「畑土」及びCと考えられる試料のチャートでは、粘土と土器共に、「山土」等のチャートの2θ19.5度付近の所謂「カオリン鉱物」のd値の値に相違が認められる。

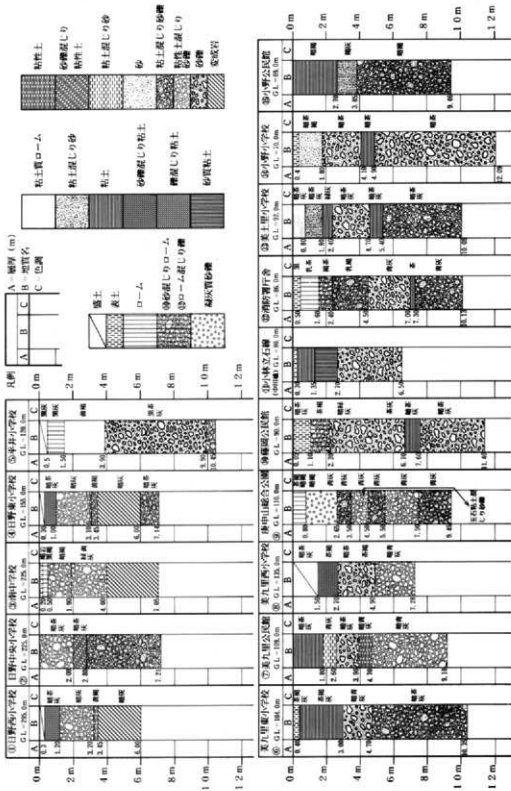
又、「畑土」とCでの土器と生地土では、montmorillonite (モンモリロナイト) の存否に相違が認められるが、これは、montmorillonite (モンモリロナイト) の分子構造中 (OH)₂ (第6表参照) が焼成により発水したことに原因すると考えられ、montmorillonite (モンモリロナイト) の端成分が、SiO₂・Al₂O₃等に変化したことにより、焼成物の土器のX線回折チャートには反応しなかったと考えられる。

この montmorillonite (モンモリロナイト) は、焼成に伴って発水するが、これに伴う物理的变化に就いては、未だ、その詳細を記したものは管見の及ぶ範囲には無い。

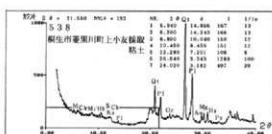
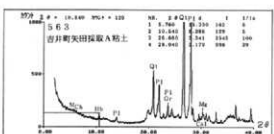
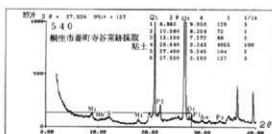
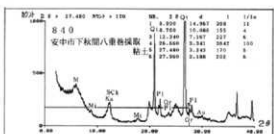
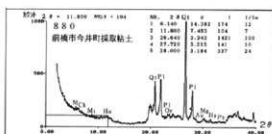
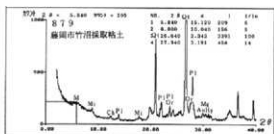
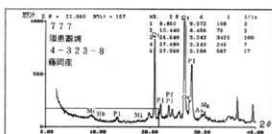
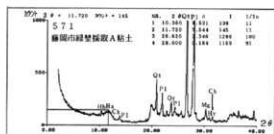
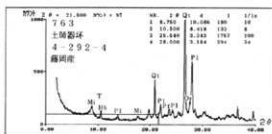
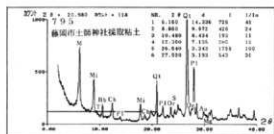
「畑土」及びCの組成鉱物と推定される組成鉱物に就いては、前段でも記述を行った。そして、



第19図 藤岡市内ボーリングサイト地点図 (対獣31より)



第20図 藤岡市内ボーリング柱状図 (文献3より再編集)



第21図 県内各地採取の粘土のX線回折図(第四紀分析)

これらの組成鉱物が後背地の地質と大きく係わることから、孰れは、水系毎の地質の分析も胎土分析を行うに当たって必要とならう。

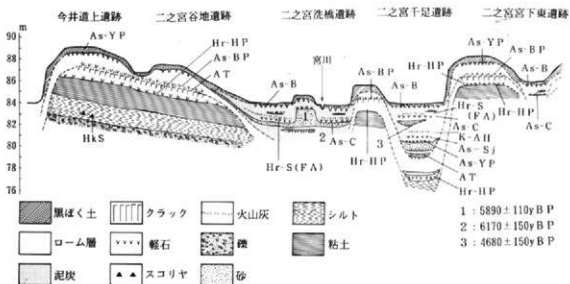
胎土の肉眼観察では、特に吉井古窯跡群の製品には、縞状の断面が見られるものが多い。この要因に就いて、井上 巖氏に質問してみたが、明解な解答が無かったものの、この montmorillonite (モンモリロナイト) の発水に係わるのではないかという示唆的な発言を受けた。しかし、この場合、montmorillonite の分子配列が縦位に一定でなければならず、土器の胎土とすれば、この条件ではやや無理と思われる。結果的には不明であった。

東毛地域の粘土と土器

東毛地域の北側には、第四紀の段階で成長を遂げた赤城山がある。この赤城山の噴出した火山灰・軽石は、地質学でも鍵層となっている。そして、赤城山々麓は、火山噴出物等により扇状地形が発達している。

この東毛地域での粘土分布は6ヶ所が推定出来る(第10図参照)。だが、この6ヶ所以外でもほぼ同質の粘土と考えられる粘土層が、赤城山南麓に散在(?)する八崎軽石層下の粘土である。この粘土に就いては、第四分冊中で「甲種粘土」とした「赤ネバ」である。この粘土層は、ローム土が粘土化したものと思われるが、榛名山南麓でも確認出来た。又、榛名山麓の5世紀代の土師器・埴輪には、この粘土を使用したと推定出来る製品がやや多く観察出来る。

東毛地域では、この赤ネバを使用する胎土の土器は、縄文時代前には確実にあり、諸磯c式項に胎土に変化が起き、沖積地の粘土を使用すると考えられる土器が増加する。この「赤ネバ」を



早田 勉「付図4 群馬県内主要地域の地質断面図」
『群馬県史 通史編1』平成2年(1990)より

第22図 前橋東部の地質断面図

使用すると考えられる土器の胎土には、八崎軽石層に含まれる高温石英(β quartz)が目立っている。この赤ネバで、勢多郡富士見村米野地内で採取した試料が胎分No963で第15図中に回折チャートに掲載した。

定量的分析では、 SiO_2 値が低めで $\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot \text{Fe}_2\text{O}_3$ の両者の計測値も高い。定性分析では、全体に鉱物の混入が少ない様に見受けられる。

この外、伊勢崎市北部から、前橋市今井町にかけて広域に賦存する粘土層がある。層位的には赤ネバと変わりが無いと考えられるが、色調に大きな変化が認められる。以前は、故新井司郎氏が称していた「波志江の粘土」がこれに相当すると考えられる。胎分No880がこの粘土で、今井道上遺跡で採取した試料である。この880今井粘土は、定量的分析及び定性的分析の両者も前述の胎分No963とほぼ同様値を示しており、組成鉱物でも同様である。

この880今井粘土を第四紀層の平面分布図でみると、後期更新世前半に堆積されたとする扇状地下に賦存すること、八崎軽石層の存在からすれば、扇状地形成時に堆積した粘土と考えられ、963米野粘土の存在等から、扇状地の形成される状況はほぼ同時期に広域に及んだことが推測される。

東毛地域では、雷電山・笠懸・太田・桐生の古窯跡群を擁している。これらの内、桐生古窯跡群を除けば、孰れも富岡層群の露頭周辺部に展開している。そして、周辺部の地下に賦存するであろう粘土は、上述の状況と同様に後期更新世後半に堆積したとする、大間々扇状地の堆積時期に堆積したと考えられる。粘土では胎分No565・566が笠懸古窯跡群の山際地内で採取した試料である。この試料でも、定量的分析の結果の傾向と定性分析の結果の傾向が、上述の胎分963・880と類似している。

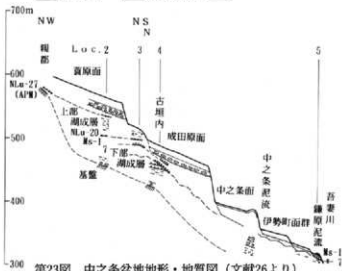
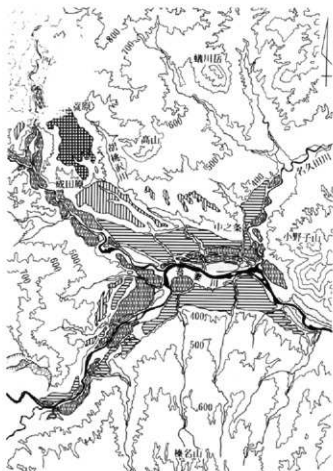
又、桐生古窯跡群では、各地点によってばらつきが生じており、特定し得る如くの状況は残念ながら認められなかった。

上述した胎分No963・880・565・566は、西毛地区の状態と異なった状況下での堆積であると判断される。

東毛地域では、扇状地形成と粘土の賦存に大きな係わりがあるとするならば、東毛地域の粘土分布域は非常に広い地域に及ぶことが類推出来る。そして、東毛地域で製作されている土師器は、藤岡地域より、より散在的な生産体制が組まれたと考えられるが、7世紀末以降8世紀代の土師器坏や、9世紀代の指標となる「コ」の字状口縁の土師器壺、9世紀末から10世紀代の羽釜で、等も地域での生産と考えられる製品には、形状や細部の技法等西毛地区の工人が移動乃至派遣されたかして焼造された可能性がある。これは、土師器や特定の須恵器の器種に限ったことではなく、瓦に於いても、同様な状況がある。これらの点に就いては近日中に原稿化の予定があるのでそちらに詳述したいと考えている。

北毛地域の粘土・土器・瓦

北毛地域は、中之条古窯跡群・月夜野古窯跡群が立地する地域である。この両者の窯跡群を成立させる背景たる粘土の賦存状況は、両者共に第四紀の湖成化に伴う粘土堆積であり、前者が、



第23図 中之条盆地地形・地質図 (文献26より)

古中之条湖、後者が、古沼田湖である。

そして、この両者共に第四紀の火山活動が原因となり、古中之条湖は子持山・小野子山の火山活動により、古沼田湖は、赤城山の火山活動によるものである。

中間地域での胎土分析は、遺跡で出土する遺物の中で、供給量が多いと考えられる窯跡群の資料を供試料化したことにより、出量が極めて少なかった北毛地域の製品・粘土の分析は実施しなかった。

この為、本段で記述出来得る内容が無い。

然し、須恵器・瓦の窯跡群としての両古窯跡群の外に、藤岡地区の如くの、土師器の生産単位が、月夜野地区に疑定出来る為、この点を指摘出来ればと考えた。

この節地区は、月夜野古窯跡群の範疇に入るのかも知れないが、成立背景が異なると考えられる点から、今後検討しなければならない課題としておきたい。

尚第21図は、中之条盆地内の地質分類図で粘土の賦存状況を示唆する図であらうことから掲載した。

おわりに

群馬県下には、10ヶ所に古窯跡群が存在することは周知のとおりである。そして、この古窯跡群で焼造される須恵器・瓦の原料である粘土は、逆説すれば、生産活動の背景となった地下資源である。この、10ヶ所の古窯跡群の名称設定時では、窯業生産活動の製品として、須恵器・瓦に代表される登窯での焼造による生産地域をもって、一つの古窯跡群として捉えている。だが、古代の窯業生産品の中には、土師器の生産がある。

土師器は、通論的には、あたかも、各集落で必要に応じ生産していたかの如くの説があるが、具体的な検討はその一切が行われていないのが現状である。

然し、土師器の観察を長年に亙り実施して来た結果と、この結果に基づいた推定から現地踏査を実施した結果から、県西部の藤岡・吉井地区（多胡郡建群以前の緑野郡域）に土師器の生産母体が存在することが筆者自身確信出来るようになった。この藤岡・吉井地区には、前述した通り、「畑土」「山土」の採取の容易な粘土が賦存する地域である。だが、「畑土」には、その質的な面で可塑性の少ないものも採取されていた様である。この質的な面をカバーするのが「技法」であるが、この「技法」こそが、筆者が唱える所の「型作り成形」である。この「型作り成形」の背景となるのが量産体制の確立であって、その兆しが6世紀前半にあると推定している。この6世紀前半は、安閑紀の「上毛野国緑野屯倉」の設置された頃でもある。

この藤岡・吉井地区での土師器生産は、10ヶ所の古窯跡群設定時には含まれていなかった要件である。又、東毛地域の伊勢崎市北部から前橋市東部域にかけても粘土が賦存する地域でもあり、藤岡・吉井地区同様に土師器の生産が行われていたことが胎土の肉眼観察及び胎土分析によりある程度推定出来る様になった。このほか、月夜野地区（月夜野古窯群とは別の地区）の御遺跡の如く、同地域の中核的集落の周辺でも土師器の生産が推定されるところでもある。

第10図には、6を除き、古代の窯業生産活動が想定出来る地域を図上に示したものである。これら14ヶ所は、粘土の賦存を背景にしている。又、これら15ヶ所の粘土堆積条件は、後背湿地—1・12・14・(2)、湖成層—6・7・8・13・15、新第3紀層堆積粘土—4・5・11、扇状地—9・10、段丘性粘土（湖成土か）—3、に分類される。然し、これは、当時の周辺土壌や、胚胎とする後背部の地質と直接的関係があり、粘土成分は地質に根差している。土器胎土分析による地域傾向把握には、1、地質図、2、組成鉱物の分析、3、9元素の分析の三者が必須条件である。

今後、土師器の生産体制に就いて、埴輪・須恵器・瓦・炭・その他の窯業生産体制を考慮する中で詳述したい。

尚、本拙文を草するに当たっては、飯島静雄氏より地質学に就いての多くの御教授を賜ったが、正しく理解したか筆者としては不安を残すところである。末筆ながら謝意を表したい。

註及び参考文献

註

- 註1 粘土に対して砂を混ぜる点に就いては、故新井司郎氏が『縄文土器の技術』の中で述べられているが、自然風化による混入に似ている。粘土に対して砂を混ぜることは、亀裂の防止、耐火度を高くするなどの効果があるが、この混入した砂を土器の中から見つけるのは非常に困難であるが、古墳時代前期のS字口縁の台付壺の付加粘土の場合、土器本体の胎土に粗い砂を混ぜ、亀裂を防止しており、この場合に於いて、土器本体の胎土中の砂分と付加粘土の砂分を比較すれば、混入している砂を抽出することは可能であろう。付加粘土=園分寺中間地域第1分層中で筆者が抽出した。これは、台付壺の脚部と底部の接合部に、亀裂の防止の為、成形後脚部に、土器本体の胎土に砂を多く混入させた粘土を脚部内面側から両面側から後行して貼った粘土。
- 註2 本邦に於ける分類では、粘土=1/25mm以下の粒径、シルト=1/16mm~1/25mmの粒径、砂=2mm~1/16mmの粒径を指す。(『理科年表』昭和61年1986 第59冊 東京天文台編纂 丸善株式会社 による)
- 註3 筆者が採集している粘土は、土器の胎土分析の比較の為本編中にも分析試料として供したが、試料にしていない粘土も多い。
- 註4 相原建史「4. 群馬県の古窯跡群の概観-群馬県における天代瓦窯の特質」『天代瓦窯遺跡一中之条古窯跡群における天代C地区瓦窯の調査』中之条町教育委員会 昭和57年(1982)

参考文献

- 藤本治義・小林 学「群馬県碓氷川及び碓氷川流域の第三紀層に就いて」『地質学雑誌』四十五巻五三三三號 昭和13年(1938)
- 土地分類基本調査地質調査「富岡5万分の1」国土調査 経済企画庁 群馬県 昭和32年(1957)
- 佐々木 実「群馬県高崎丘陵地帯地質調査報告」『地質月報 Vol.9』昭和33年(1958)
- 新井房夫「関東盆地北西部地域の第四紀編年」『群馬大学紀要』自然科学編 第10巻 第4号 群馬大学 昭和37年(1962)
- 小村三雄「第四章 地質」第一部自然篇『安中市史』昭和39年(1964)
- 須藤俊男「粘土鉱物学」昭和39年(1964)
- 秋間団体研究グループ「群馬県安中市北部の第三系」『地球科学』25巻5号 昭和46年(1971)
- 秋間団体研究グループ「群馬県烏川支流、相間川流域の地質」『地球科学』29巻4号 昭和50年(1975)
- 浅田栄一・貴家勉夫・大野勝美「X線分析基礎分析化学講座24 共立出版 昭和50年(1975)
- 大沢真澄「考古資料の理学的分析と年代測定法」『地方学マニユアル 考古資料の見方』昭和52年(1977)
- 中山茂樹「碓氷川流域の河岸段丘」『駒沢地誌』14号 昭和53年(1978)
- 橋崎彰一・山崎一雄・飯田忠三・内田哲男「陶磁器の輪蓋及び胎土の成分から見た産地同定の研究」『考古学・美術史の自然科学的研究』古文化財編纂委員会編 日本学術振興会 昭和55年(1980)
- 長友恒人「竈向遺跡出土土器の材質」『考古学・美術史の自然科学的研究』古文化財編纂委員会編 日本学術振興会 昭和55年(1980)
- 三辻利一「胎土分析による土器の産地推定：蛍光X線法」『考古学・美術史の自然科学的研究』古文化財編纂委員会編 日本学術振興会 昭和55年(1980)
- 三辻利一「土器の微量成分と産地推定：放射化学分析法」『考古学・美術史の自然科学的研究』古文化財編纂委員会編 日本学術振興会 昭和55年(1980)
- 須藤俊男・下田 右・会田健武郎「粘土電子顕微鏡写真図譜」昭和55年(1980)
- 五十嵐俊雄・藤原 正「群馬県藤岡地区の瓦原料粘土鉱床」未開発陶器原料資源調査報告書昭和55年度 工業技術院地質調査所 昭和56年(1981)
- 野村 哲・秋間団体研究グループ「関東平野縁の地質」『地質学論集』第20号 昭和56年(1981)
- 天野義治「粘土鉱物測定法再考」『火山灰と土壌』昭和58年(1983)
- 三辻利一「古代土器の産地推定法」ニュー・サイエンス社 昭和58年(1983)
- 町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫「『ナフラ』と日本考古学」一考古学研究と関係するテフラのカタログ 昭和59年(1984)
- 須藤定久・花岡統一「群馬県南西部地域の粘土資源」陶器原料資源調査報告書 工業技術院地質調査所 昭和59年(1984)
- 『日本の地質3 関東地方』日本の地方編纂委員会編 共立出版 昭和61年(1986)
- 『理科年表』『元素』昭和六十一年版 昭和61年(1986)
- 飯島静男・田中安之「群馬県地質院関係文献の基礎調査」『群馬県立歴史博物館調査報告書』第2号 昭和61年(1986)
- 竹本弘幸・米澤 宏・由井将雄・小池一之「中之条銅成層の順序とフィッシュ・トラック年代」『駒沢地誌』昭和62年(1987)
- 吉川和男「出土土器の鉱物学的研究」『行幸田山遺跡』茨城県発掘調査報告書第12集 茨川市教育委員会 群馬県企業局 日本道路公社 昭和62年(1987)
- 飯島静男「群馬県の地質」群馬県植物誌(改訂版)別刷 昭和62年(1987)
- 藤原宏志「土器胎土分析法と定量分析法」『土壌学と考古学』昭和62年(1987)
- 「新しい研究法は考古学になにをもたらしたか」第3回大学と科学公開シンポジウム組織委員会 平成元年(1989)
- 「藤岡市の地形・地質」『藤岡市史 自然編』藤岡市 平成元年(1989)
- 「アーバンクボタ」№29 MARCH1990 クボタ 平成2年(1990)
- 興津昌高「遺物分析グループ」『PALYNO』vol.1 パリノ・サーヴェイ15周年記念講演会特別号-パリノ・サーヴェイ 平成3年(1991)
- 大江正行「第6節手工業生産の発展 二窯業」『群馬県史』通史編2 原始古代2 群馬県 平成3年(1991)

藤岡市上栗須遺跡出土の刀装具について

齋藤利昭・木津博明

1. はじめに

本稿は、平成元年に筆者が編集した、当団発刊の前橋・長瀬線調査報告書「上栗須遺跡・下大塚遺跡・中大塚遺跡」で未掲載となった資料を紹介し報告を補うものである。

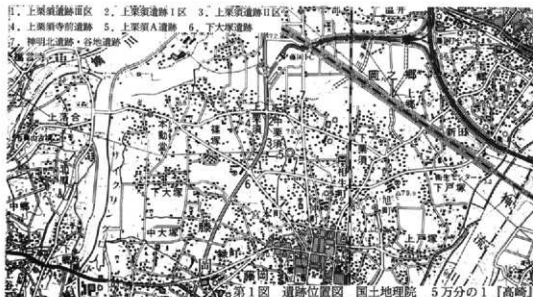
ここで紹介する資料は、上栗須遺跡Ⅲ区（上栗須字岡前）14号住居跡出土遺物の金銅製宝相華文魚々字文足金物である。稿中では、本品の彫金技法や意匠等を観察・図化し、熊野堂遺跡⁽¹⁾出土装飾金具及び国分寺中間地域出土金銅製飾具等の県内出土類例資料等を参考に、本品の性格及び、本品の存在が示唆する側面から上栗須遺跡の性格に就いて若干の検討を行うものである。

2. 遺跡の概要

本遺跡は、藤岡市街地の北西部に位置し、東西を北流する神流川、鮎川両河川の形成した開折扇状地上に立地する。遺跡周辺の地形は旧鮎川の影響により北東方向に緩やかに傾斜する。

台地上の遺跡の立地は、縁辺部に縄文時代以降の遺跡（神明北遺跡⁽³⁾、谷地遺跡⁽³⁾、寺前遺跡⁽⁴⁾Ⅰ区等）が立地し、また方形周溝墓を含む篠塚古墳群が所在する。台地内陸部では、奈良時代以降に集落（上栗須遺跡Ⅱ・Ⅲ区、下大塚遺跡、上栗須A遺跡等）が営まれるようになる。

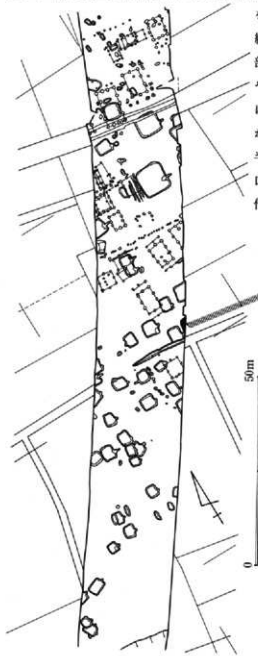
本遺物を出土した上栗須遺跡Ⅲ区は、7世紀後半の一辺約8m弱の大型竪穴住居跡を中心とした集落が初現であり、10世紀代まで継続して集落が営まれる。また、この集落では8世紀代に掘立柱建物跡群を構成する時期が認められ、上栗須遺跡Ⅱ区の南端からⅢ区中央にかけて3間×4間の大型掘立柱建物跡を中心に2間×3間の掘立柱建物跡が規則性を持って配置されている。



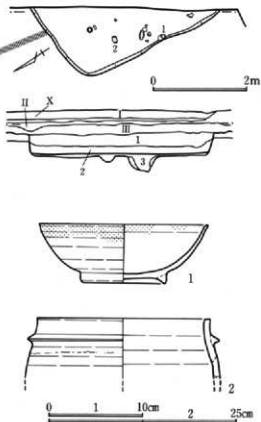
3. 遺構と遺物

本品を出土した14号住居跡は、遺跡中央部の調査区外に伸びる。住居は約1/3のみ調査を行い、規模は西壁確認部分で約3.2m、確認面からの深さは5cmを測る。重複は、近接する時期の10号住居の煙道部を壊し作られる。竈、貯蔵穴、柱穴等の施設は未確認である。本品は住居北西隅の床面より単品で出土し、共伴遺物には灰釉陶器碗と羽釜がある。灰釉陶器は口径17.6cm、器高6.2cm

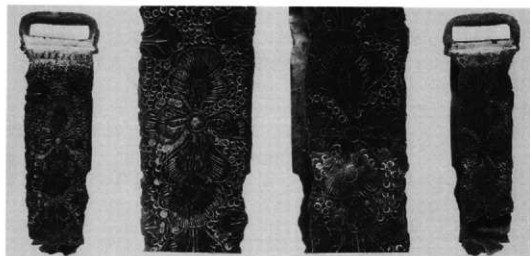
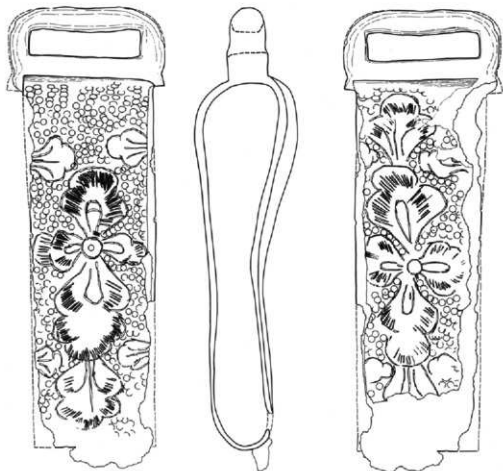
を測り、やや大型の碗である。体部は丸味を持ち口縁部に立ち上がり、口唇部は僅かに外傾する。高台部は外面は内湾気味に、内面は外傾し三日月形がやや崩れる。底裏は回転へら調整。施釉は薄く口縁部に付近に浸け掛けされる。胎土は緻密で硬質であるが小砂礫を含む。特徴から大原2号窯式（10世紀前半）に対比されよう。羽釜は、口径22.2cmを測り、口縁部は直立気味に立ち上がり、口唇部は平坦面を作る。銜は貼付け後軸轆回転ナデが施される。



第2図 上栗須遺跡Ⅲ区 全体図



第3図 14号住居跡平面図・出土遺物図



第4図 14号住居出土力装具実測図(×2)及び遺物写真

4. 金銅製宝相華魚々子文足金物

本品は、前項で記述のあった上栗須遺跡Ⅲ区第14号住居跡の床面直上より出土している。

遺存状態は、全体に錆化は顕著ではないが、部分的に旧状を著しく失っている。帯軌の通孔部では、外縁が軽微な錆化により旧状を幾分か逸しているが、内縁部は、錆化が認められるもののほぼ旧状を呈し、基部周辺は、塗金も鮮やかに遺存している。鞘部側では、下端部に著しく腐食し、片面の縁辺も同様な状態があるものの、反対側の面は比較的遺存が良好である。だが、鞘部側の塗金の残存は文様の窪んだ部分にのみ遺存し、平面的な遺存は悪い。

大きさは、通高5.750cmを測り、帯軌の通孔部は、幅2.005cm・重ね0.355cm・高0.920cmを測る。鞘部側は、幅1.680cm・高4.830cm・厚0.950cmを測り、鞘の重ねを復元すると1.05cmである。(計測は、日本工業規格1級ノギスを使用)

形状は、帯軌の通孔部には、鞘側寄りに削り込みを施しており、形状を丸味の帯びた状態を表出させている。鞘部側では、縁辺部に面取りを行っている。

作りは、鞘部側と帯軌側の熱圧着によると考えられ、鞘部側では、1枚の銅板を下端を中心として丸くし、上端側の帯軌部側の熱圧着部で接合する状態であって、鞘部側と帯軌部側の接合部は、鞘部側の接合も兼ねた状態となっている。尚、文様の施文は、この熱圧着成形後である。

文様は、主文様に宝相華文を配し、間隙に魚々子を配している。宝相華文は、表裏での均整がとれておらず、第4図の実測図右側は、全体的に中心位置が左に偏在している。文様の表出技法は、非常に細かく尖った鋳先で小単位に連打する毛彫りで、1回の鋳による表出長は均一ではなく、全体的にばらつきが目立っている。

魚々子は、基本的に二者の施文がある。一つは、宝相華文の間隙を縦列に充填するもの。今一つは、幾分広い部分をアトランダムに縦列連打するもので、後者の傾向は、第4図の左側で顕著に認められる。又、両面には、銅版状段階での研ぎによる数条の「ヒケ傷」が縦列に認められる。

又、文様の割り付け状態と姿から図上左面図が佩表側になると思われる。

県下に於ける宝相華文及び魚々子文の既存類型として、上野国分僧寺・尼寺中間地域(以下中間地域と略称) D区14号住居例⁽⁶⁾・C区140号住居例⁽⁷⁾・I区210号土坑例⁽⁸⁾、鳥羽遺跡L区78号住居例⁽⁹⁾、熊野堂遺跡49号住居例⁽¹⁰⁾4点の合計8例の類型が挙げられる。この類型は孰れも仏具乃至仏器に係わる部分的な遺物であるが、意匠・技法等を対比し得るものである。

熊野堂49号住居例は、文様全体が均整が良くとれており、毛彫りの状態は均等で極小単位に丁寧な鋳運びをしている。然し、本例を含め中間地域D区14住居・C区140号住居・鳥羽L区78号住居例は、孰れも鋳運びは統一性の無い乱雑な状態である。そして、前者の宝相華文は伸びらかであるのに対し、本例及中間地域C区140号住居例は伸びらかさの無い意匠化されたものである。又、魚々子では、中間地域I区210号土坑例が最も細かなものであり、熊野堂例を除く類型は、ほぼ同程度の大きさの魚々子で1回の施文動作は1・2・3～4点の打ち込みが主体的な施文である。

本品の宝相華文及び魚々子文は、中間地域C区140号住居例に類する状況が看取される。この状

況は、品位・所産時期・工人（工房）等未解明不分明の基本的問題の中に内在しており、今後に託する部分が多であり類例等の増加を待って再考を必要とする。

5. おわりに

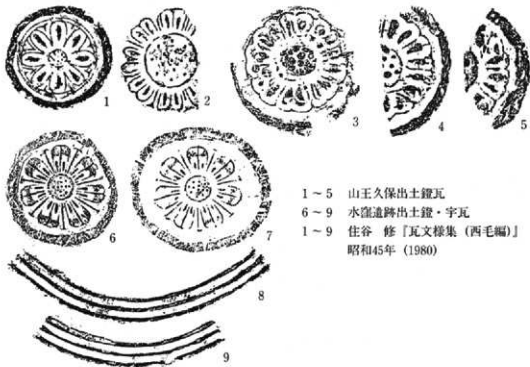
本品の遺跡内での存在は、単に住居内出土遺物として片付けられるものではなく、遺跡の特殊性を内包する遺物であると考えられる。以下、本品の出土状態や本遺跡内の遺構配置及び周辺遺跡の検討を行う中で遺跡の性格等について列記しまとめとしたい。

本品の製作年代については、10世紀前半の灰釉陶器が共伴する住居内出土遺物ではあるが、宝相華文の意匠化した段階として製作年代は9世紀代に推定される。

本品の使用については、本品が金銅製宝相華魚々子文の装飾が施されている足金物であることから、儀仗用に使用された大刀であろうと考えられる。

本品の所有形態については、住居内出土遺物ではあるが単体での出土であり、住居が完掘されていない現状では把握できない。

上栗須Ⅲ区における遺構の配置は、路線内の他の遺跡と比較した場合に各時期とも整然と配され、竪位置・主軸方向・棟方向に統一性が伺われる。7世紀代の初期集落では、路線内最大の竪穴住居跡を中心とした竪穴住居群が遺跡北寄りに位置し、8世紀以降はこの大型竪穴住居跡周辺



1～5 山王久保出土鏡瓦
 6～9 水窪遺跡出土鏡・宇瓦
 1～9 住谷 修「瓦文様集（西毛編）」
 昭和45年（1980）

第5図 山王久保・水窪遺跡出土瓦拓影図（1：5）

に掘立柱建物跡群が配される。この掘立柱建物跡群は北辺を欄列で区切り、3間×4間のやや大きめの掘立柱建物跡と2間×3間の庇を持つ掘立柱建物跡等が建てられ、部分的には掘り変えの柱穴も見られる。また、掘立柱建物跡群とほぼ同時期の竪穴住居跡群は、遺跡中央部から南に展開し、鉤の手状の直線的配列がこの竪穴住居跡群に見られる。

当遺跡の南に所在する下大塚遺跡では、東西方向の溝中より重弧文字瓦片が出土しており、隣接する山王久保(三ノ久保)では同様の重弧文字瓦と複弁八葉文(第5図参照)の軒丸瓦を出土しており、8世紀初頭には謂所「山王・秋間系鎧瓦」を葺く水窪遺跡(寺院跡)も至近の位置関係にある。また、同遺跡には、路線内最大規模の布掘りを有する3間×4間総柱掘立柱建物跡が検出されている。そして、路線に隣接する寺前遺跡では大規模な掘立柱建物跡が多く検出されており、藤岡市内の遺跡では当遺跡を含め特殊な状況が当該地域周辺に集中する傾向が窺える。

本遺跡を含めバイパス路線内及び周辺遺跡では、7世紀以降に集落が出現するが、それ以前の集落の存在は確認されていない。このことは、遺跡周辺部が鮎川扇状地形成時の名残りである砂礫層の発達により保水力が弱く、これにより生活水や水田耕作等には溝等の水利施設を必要とした地域であり、7世紀以前に集落の形成が無いことは、当遺跡地が未開発地域であったことが想起される。

以上のことから当遺跡は7世紀以降に集落が始まり、8世紀代には水窪・山王久保遺跡の存在から窺えるような緑整郡内でも中心的な地域と考えられ、本品はこの特殊な状況下での存在であることが明らかであろう。そして、この特殊な要件を満たす要素として8～9世紀に継続的に突出した地域、即、官衙(緑整郡衙?)等(富豪層の館)の存在が示唆されるところである。

最後に、本資料が報告書未掲載となってしまったことについてお詫びするとともに、小稿を草するにあたり、大江正行、神谷佳明、山口逸弘の各氏から多くのご指導・ご教示を頂き、末筆ながら記して感謝いたします。

註

- (1) 『熊野堂遺跡(2) 上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書第14集群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
- (2) 『上野国分僧寺・尼寺中間地域(4) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
- (3) 『C7神明北遺跡・C8各地遺跡 藤岡市教育委員会 1987
- (4) 『年報 8 』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- (5) 『年報 9 』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
- (6) 『上野国分僧寺・尼寺中間地域(3) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
- (7) 前掲註2
- (8) 『上野国分僧寺・尼寺中間地域(7) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
- (9) 『鳥羽遺跡L・M・N・O区 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
- 08 前掲註1

参考文献

- 『正倉院の大刀外装』宮内庁 正倉院事務所編 小学館 1977
『新版日本刀講座(第8巻)外装編』後藤守一 宋永雅雄 雄山閣 1968
『MUSEUM』No.33, 『日本の魚々子—受容と展開』中野政樹 東京国立博物館美術誌 1983
『日本の美術 刀剣 第6号』在藤家山 至文堂 1966
『正倉院』『魚子打ちの技術』東野治之 岩波新書42 岩波書店 1988

西上野における古瓦散布地の様相

川原 嘉久治

1. はじめに

筆者は長年に亘り推定上野国府域をはじめ、西上毛野（以下西上野）地域における古瓦散布地および、その生産地を求めて広く踏査・表面採集を行ってきたところである。その中で採集遺物の一部については「関東古瓦研究会・研究資料1」（1981）、「同3」（1982）「土器部会研究資料1」（1982）に緊急掲載し、紹介を兼ねて資料の保存活用を行ってきた。しかし長い年月の踏査活動において得られた収集資料は、実践的活動の累積から次第に重要性を帯びてきた。したがって、これらの資料をより多くの研究者の参考に供する意味合いから、本稿において改めて資料紹介の稿を起こした。なお、推定上野国府採集の遺物類は含んでいない。

抑々、筆者による分布調査研究の切掛は、古代の信仰の系譜を追究する過程において、既存史料のみではその趨勢をとらえることは至難であった。すなわち、地方における神社・寺院などの信仰関係に対する史料・記録類は薄弱で、広く、そして深く実像を求めることは不可能であり、遺物類・地縁などの援用の必要性を痛感することにはじまる。しかし現状は開発による遺跡破壊と、近代化のうねりの中で田畑・山林など、荒地化傾向は進み、向後に憂いを抱く次第である。それに加えて、先人ら研究の足跡を直接この目で確認したいという願望が重った。

以来20余年、西上野を中心に山・野・川などを踏査した結果、窯跡、庵寺跡、それに伴う瓦・土器類の新発見と、既報告の誤りの部分へも到達するという幸運が重なるなどして、古代西上野における社・寺信仰のつながりが氾濫ながらも見えてきた。しかし、これらの遺跡のほとんどはとうてい発掘調査のおよばない地域にあり、またそれらの資料が古代西上野における宗教史に与えることの重大性を考え、ここに広く一般に公表することにした。

下記遺跡の性格付けは、遺物・遺品（信仰の系譜を認めるもの）と、歴史的経緯・地域的環境（地縁）をあわせて存在理由を考察するもので、官衙、宗教・信仰の系譜分類の中心的役割は瓦類と、信仰思想の系譜によった。

榛名山東南麓の古代寺院の場合は、榛名連峰を頂点に、延喜式内社上野国榛名神社嚴寺⁽³⁾（瓦なし・神社即寺院型。密教修行の場として求めた山林寂靜清浄の地すなわち深山幽谷に立地する）、伊香保神社などに見る十一面観音を御正体・本地仏を安置（伝存）する系譜と、推定瓦葺仏堂所在地（現時点における瓦類の採集結果であるが、瓦葺でない寺もあるかも知れない。それも含む。教理を開く仏堂主導型）の両者により性格付けを行った。

また、官衙・官衙関連推定地（郡寺含む）については、「山王・秋間系複弁七葉蓮華文鏡瓦」⁽⁵⁾使用例による分布圏の展開によった。

しかし、前二者のうち、後者の場合、特にその生産地に大きな比重が寄せられ、既報告の「八重巻窯跡」⁽⁶⁾に注目、現地踏査により「山王秋間系複弁七葉蓮華文鏡瓦」焼造窯跡群の新発見があり、稿立ての軸におくことにより、西上野における宗教史に新たな一頁がより充実した内容で書き加えられるようになった。

以上による予想外の成果は、所謂、足で稼いだ汗の結晶であって「犬も歩けば棒に当たる」の譬ではないが、歩けばわかるの「原点」の真実を伝えており、胆に銘ずるところであった。

遺物等による遺跡の性格は、官衙、宗教・信仰（神社）、窯跡に分類した。

名 称	所 在 地	古代の郡名	性格	摘 要
種名山東南麓の古代寺院				
① 水沢庵寺	北群馬郡伊香保町大字水沢	東 群 馬 郡	宗教・信仰	詳細追究中 白岩長谷寺
② 黒髪神社散布地	〃 榑東村大字広馬場	西 群 馬 郡	〃	
③ 唐松庵寺	群馬郡箕郷町大字中野	〃	〃	
④ 生原中内出散布地	〃 〃 大字生原	〃	〃	
⑤ 奥原散布地	〃 榑名町大字本郷	〃	宗教	
⑥ 黒見庵寺	〃 〃 大字中里見	片 岡 郡 か	〃	
観音山丘陵の古代寺院				
⑦ 兼附庵寺	高崎市兼附町字宮尾根	片 岡 郡	宗教	詳細追究中
⑧ 鹿島神社遺跡	高崎市根小屋町字鹿島	〃	宗教・信仰	
多胡郡の古代寺院（多胡郡建郡以降）（いずれも踏査継続）				
⑨ 馬庭東庵寺	多野郡吉井町大字馬庭	多 胡 郡	宗教	多 胡 寺 か
⑩ 岡南寺	〃 〃 大字池	〃	〃	郡 衙 ・ 寺 か
宮ノ西散布地	〃 〃 〃	〃	官衙	多 胡 郡 衙 か
⑪ 榑木味散布地	〃 〃 〃	〃	〃	〃
甘葉郡の古代寺院				
⑫ 桑原峰散布地	富岡市桑原字峰	甘 葉 郡 か	宗教	詳細追究中
緑野郡の古代寺院				
⑬ 淨法寺遺跡	多野郡鬼石町大字淨法寺	緑 野 郡	宗教	緑 野 寺
秋間丘陵の生産窯跡				
⑭ 東谷津窯跡支群	安中市下秋間字東谷津	碓 氷 郡	瓦・須恵器窯	
観音山丘陵の生産窯跡				
⑮ 小塚窯跡	高崎市寺尾町字小塚	片 岡 郡	瓦・須恵器窯	詳細追究中
⑯ でえせえじ散布地	高崎市山名町字山神谷	〃	瓦窯主体か	

以下、本稿の進行は上表に順じて扱うが、下記の三点を含むことを付記しておきたい。

1、各遺跡の小結はそれぞれの項の本文中において行う。

1、遺物類、その他については、各図面の中において註釈することで紹介を兼ねる。

1、表中に摘要記載の「詳細追究中」とあるのは、現在も踏査続行を示す。

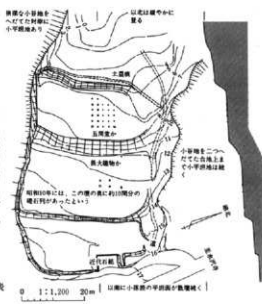
2. 遺跡の概要

① 水沢廃寺



1:20,000
現水沢寺より約700mの位置は、同寺の所伝・『神道集』の表現を考え合わせると、直接の関係を考えざるを得ない。

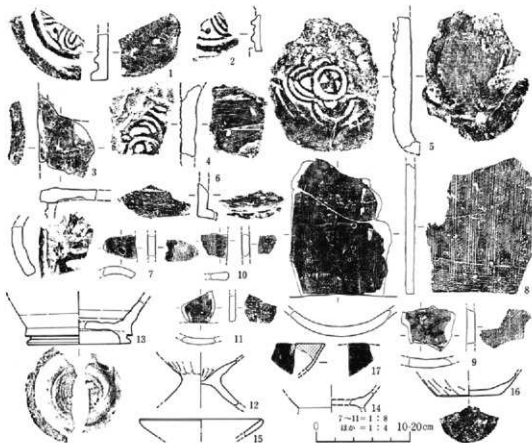
第1図 遺物位置図



第2図 遺跡現況図

北群馬郡伊香保町大字水沢字政所423番地にあり、標高580mの杉林中に10段の削平壇が見られる。高低差約20m、全長はおよそ200mの緩斜面を削平し、上から第二段目の大削平壇は東側に土塁を備え、礎石の存在と古瓦の散布が認められるが、採集遺物の多くは削平壇の南辺の沢に沿って通る林道開削による切取面（現在も自然崩落が続いている）中から発見している。10壇の削平壇のうち明瞭な所は第5段までで、第6段以降はかんたんな削平を施されたと思われる小区画である。1970年、県の重要遺跡調査による中枢部測量により図化された最上段の削平壇には柱間2.4mの五間堂（約12m）と次壇に長大な建物跡が並行して確認されている。建物については採集遺物の甍瓦第3図1～6、及び土器類同図12～16による類推により、9世紀前半には瓦葺建物の存在が浮び上がり、灰軸陶器同図15～17の年代が10世紀におかれることから水沢廃寺の存続期間はおおよそ200年に亘ると推定することができる。

水沢廃寺の文献的考察を『神道集』⁽⁷⁾（中世）「第四十二、上野国第三宮伊香保大明神」によると「(前略)伊香保山ノ東ノ麓ニ、岩滝沢ノ北岸、云ニ梨手ト一、今ニモ水梨木有ハトソ承、シ此所ニ寺ヲ立、郡馬ママ郡ヲ寺領トシテ、(中略)岩滝沢ノ岸ナレハ、寺号ノ額ヲハ水沢寺トシ打…(後略)」とあり文中の岩滝沢は船尾滝に発する現滝沢川をさし、北岸の梨手という小沢は、前出削平壇の南辺を流れる沢がこれに推定できる。この『神道集』は水沢寺の本尊を千手観音とするが、これは現水沢観音の本尊で、現水沢寺の本尊は鎌倉初期頃の十一面観音である。十一面観音は、



1～6 甕瓦、7 男瓦、8～11 女瓦。12 土師器台付甕、13 二重高台瓶、14 須恵器埴、15 須恵器酸化埴皿、16 須恵器酸化平底蓋、17 灰輪。1・2 は単弁五葉珠点中房。4・5 は単弁四葉十字中房。7 素文。8・9 縄目。10・11 裏面に蒺藜状目、10 の側部に布目痕あり、13 糸切、17 内面浸し掛、外面不明。胎土は1～6 秋間か、7 秋間・栗附（観音山丘陵）か、8～11 秋間か、13 栗附か、14・15 秋間、16 栗附以南か、の各窯跡群製の胎土に見える。時期は1～3 が9世紀初頭頃、4・5 が9世紀中～後半頃、7～9 が9世紀初頭頃、10が9世紀代、11が9世紀後半から10世紀前半頃、12・13が9世紀前半、14が9世紀代、15・16が10世紀後半頃、17が10世紀。古様は1・2・12・13があり、新様は15～17がある。

第3図 水沢廃寺遺物図

同書による伊香保神社本地仏の一で、現北群馬郡吉岡村大字久保鎮座の三之宮神社本殿の内陣に本地仏として安置されているが、榛名山の山名を冠する榛名神社には御正体として鎌倉初期頃の毛彫十一面観音が伝存し、さらに船尾山縁起を持ち、その旧地を船尾滝の上に推定される北群馬郡棟東村大字山子田の柳沢寺、群馬郡榛名町大字白岩の長谷寺（唐松廃寺関連）など、榛名神社を取巻く古社・寺の御正体・本地仏・本尊に推定平安末～鎌倉初期の十一面観音がある。このことはとりまおさず、榛名神社主祭神の性格（女神）を表す（女体・十一面観音）信仰の手段として考えられるが榛名神社殿寺（瓦なし）、水沢廃寺、船尾滝上散布地、黒髪神社散布地、唐松廃寺、膳棚遺跡、生原散布地（いずれも瓦使用の廃寺跡として考えられる）など、榛名山中の深山幽谷に立地した廃寺跡は、遺物類の初現を9世紀代におき、次期には観音信仰の盛期をむかえ、榛名連峰の霊山化に至った。

② 黒髪神社散布地



第4図 遺跡位置図



男瓦1点、丸瓦2点の採集があり、散布量は少ない。2が縄目、1・2は素文である。2の側面取りは1回とわずかに別削りが加わる。その手法は9世紀以降と考えられ、2の縄目もその単位から9世紀代と考えられる。

第5図 黒髪神社散布地遺物図 1~3=1:8

群馬郡榛東村大字広馬場字上野に相馬山黒髪神社里宮が鎮座する。神社の南およそ150mの所に黒髪貯水池があり、神社と貯水池の中間(標高約360m)地帯に古瓦の散布地⁽⁹⁾がある。北は榛名連峰第二位の相馬山が目前に迫るこの地における古瓦散布地の様相は、まさに霊山化された榛名山の一端を如実に示す状況としてとらえ得るものである。前出の水沢寺、山小田の柳沢寺、白岩の長谷寺などと合わせて榛名山を取り巻く信仰の思想に一連の形態を認められる。但し、当地における古瓦採集量は少なく、これを以て古代における大寺院の存在を論ずるには資料に乏しい。



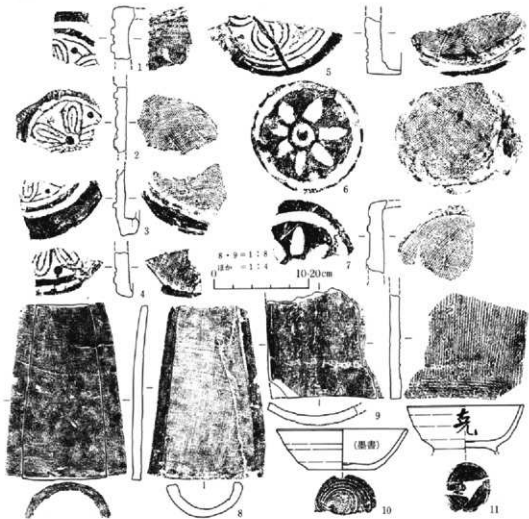
救世真教の聖地より前の沢川の各地に至るまでの500mに亘って遺物・遺構は存在し、初期に計画性はあったのかも知れないが、永年の過程の重なりを思わせる。

第6図 遺跡位置図

③ 唐松廃寺

群馬郡箕郷町大字中野字唐松の標高675~700mの山中に位置し、現在は教世真教の聖地とされるが、聖地造成の際数段の階段状削平壇、礎石、石組み壇や、瓦、土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、白磁、釘類に中世の青磁、常滑片などが多量に発見されている。この度、教団のご好意により、それら遺物類の実見と実測の機会を得た。遺物類から見た当廃寺の年代は9世紀前半頃の上限が与えられ、以降、土師器坏・塊・燈火皿、須恵器坏・塊・羽釜・大甕など10世紀代までの遺物が多く認められ、特殊遺物として風字硯(展示貸出中のため未見)をはじめ、須恵器大甕破片の転用硯も数点含まれていた。また観察中に、「急急急」、「克」、「有」など宗教に深く関わる墨書銘を発見したが、宗教や生活に関わる遺物類が多く存在することは、すなわ

ち、9～10世紀に亘り、大がかりな宗教修業の場として適合した結果の証査であり、そこに瓦葺
 仏堂の存在が浮かんでくる。なお唐松庵寺の南前方に開く前の沢の入口附近における同時期遺物
 の採集は当然その関連が考えられるが、近隣の正・俗地名の寺の狭、鐘撞山、仏沢、ヨーシハ
 バとともに現在も追究中である。この度実見した遺物類には火災を受けた状況が窺えず、中世に
 は整然とした移動が考えられ、移動先には榛名連峰霊山化による信仰の対象の一面を持つ、11世
 紀末の木像十一面観音を本尊に安置する白岩の長谷寺⁰²として考えているが、本稿においては、緊
 急資料紹介に止どめ、唐松庵寺についての正式な論稿は次号において改めて取組むことにしたい。



1～7 雄瓦、8 男瓦、9 女瓦、10 須恵器杯、11 須恵器片。1～4 は単弁五葉珠点中房雄瓦、5 単弁四葉珠点中房雄瓦、8 欄目無消、布合目、二枚作、回転痕あり。9 欄目端部T字状、側部面取削2回、10 底面糸切右回転、焼成並、灰色、内面墨書大形文字、11 もろく、淡橙色、胎土粗質、体部外面墨書「克」・底面「克」。1～4 は各地に類例の多い単弁五葉雄瓦。5 は脱出例少。6 は園分寺にも類例あり、「山王・秋間系複弁七葉雄瓦」の系統が変異した結果の最終末の七葉弁。1～4・8 は古相の例で1～4 は9世紀初頭頃、5 は9世紀後半頃。6・7 は9世紀末～10世紀前半頃。10は9世紀初頭。11は10世紀後半頃の当遺跡としては古代の盛期中、終末の遺物。

第7図 唐松庵寺遺物図

④ 生原・中内出散布地



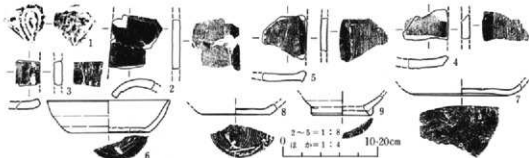
第8図 遺跡位置図



第9図 生原の砦

▲上図は山崎一「群馬県古城址の研究下」1972によるが、使用は部分である。現在でも部分的に堀切の痕跡を認める。
 ◀散布地は舌状の低い台地の端部近くに立地する。左図の下方約1cmは、水田地帯である。トーンの西側は低地であり、聖域設定を意図したら、好所となりうる場所か。

本遺跡は群馬郡箕郷町大字生原字薬師122-1番地、同中内出346番地内に亘っている。地権者の斎藤勲氏によると字薬師の場合、鏡瓦第10図1は表面採集によるが、そのほかの瓦類は表土から50cm程の下層において東西に伸びる溝状の中から発見したが、溝は瓦を埋めるために掘ったような状況を呈していたという。また少し離れた同氏の宅地内(中内出346番地)においても地下約50cmの位置から瓦・土器類などの遺物を発見するというが、遺跡地はさらに広がる様相を呈しており、瓦葺仏堂などの建物の存在が考えられるが、当遺跡地は、後代における生原の砦が構えられた場所でもある。こうした状況の中で字薬師において同氏表採による第10図1鏡瓦がある。文様構成は蓮弁の配置から単弁5葉と推定され、弁間に珠文を一つづつ配する形式で、本稿所載による水沢庵寺の採集品第3図1、唐松庵寺既出品第7図1及び、国分寺二寺をはじめ前橋市山王庵寺、高崎市綿貫遺跡、同大八木町融通寺遺跡、群馬町福島の熊野堂I遺跡など、榛名山中や東南麓にその分布を広く認める形式に類似する。この鏡瓦の当該年代は9世紀初頭頃におかれ、第10図1及び、須惠器同図9による生原・中内出遺跡の瓦葺建物存在の年代は9世紀～10世紀初頭頃が妥当と考えられ、当地における霊山榛名山信仰の系譜の一端を窺うようである。



1 鏡瓦、2 男瓦、3～5 女瓦、6～8 須惠器坏、9 須惠器碗。1は単弁五葉珠点中房鏡瓦が推定。2は東文男瓦、3種目女瓦中に横罫目がわずかに見えT字状目か。4 罫目、5外面に罫目と罫に粘土の堆出しあり。このほか罫に右庄痕のある女瓦が少数あり。2～5は採集の男・女瓦は総て秋間窯跡群製。6 秋間、7手持瓦形、8 横軸右回転余切。6・7は8世紀前～中頃。1は瓦中の古相で9世紀初頭頃。2～5は9世紀前半。9は9世紀末から10世紀初頭頃で秋間窯跡群か。

第10図 生原中内出散布地遺物図

⑤ 奥原散布地



▲近接の奥原古墳群はかつて57基の円墳が存在し、昭和45年度に発掘調査で39基の古墳が調査された。主体は7世紀代にあり、当散布地の8世紀初頭と古墳追葬の段階とが重なる時期がある。同古墳群内での瓦の散布は少なく、古墳群を意識しての占地か。同古墳群の被葬者層は、家父長墓墓と考えられている。

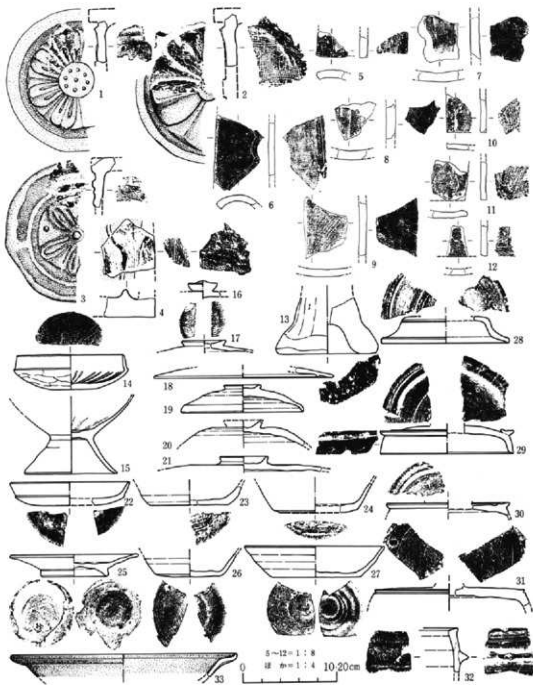
第11図 遺跡位置図



▲周辺には、奥原古墳群、約場古墳群、下長古墳群がある。約場古墳群は22基の古墳が確認され、昭和44年に小形前方後円墳を含む4基の古墳が調査され、同前方後円墳は6世紀初頭の初期横穴式石室を有し、D号墳は、制式化（慶雲四年（707）前）の小形帯金具一具の出土があり、都司層級の被葬者が推定され、同古墳群は小宮長敏墓群。

第12図 周辺遺跡図

本散布地は群馬県榛名町大字本郷字満行原にあり、標高170mに位置し、南前方を流れる烏川の対岸右手方向に里見庵寺を眺め、南西方向には高崎市乗附庵寺の遠望を可能とする。散布地の地名満行原は、延喜式内社榛名神社の分社榛名木戸神社（『上野国神名帳』西群馬郡記載の従四位榛名本モト戸明神に比定されるが、榛名神社は、中世には神仏習合により地蔵信仰から発生した宮号を「満行宮・満行権現」と称し、その名称は、神社名、地名、寺院山号名、寺院名として西毛地方に多く現存する）。散布地の確認は、本遺跡内において民家建築の際、8世紀中頃の高句麗様式有軸兼弁四葉鏡瓦が発見されたことによるが、南接地域に大規模な奥原古墳群が存在することなどから、奥原散布地として遺跡名称が与えられた（『関東古瓦研究会研究資料No.3』（群馬歴史考古同人会 1982））。当地における古瓦散布範囲は予想外に広く第11図に示すとおりで、遺物類も古墳～中世に亘り巾広く採集したが、注目される遺物として8世紀初頭頃の山王・秋間系（大江正行『天代瓦窯遺跡』中之条町教育委員会1982）の複弁七葉蓮華文鏡瓦第13図1と、8世紀中頃の有軸兼弁四葉鏡瓦同図2（前出に比べ当遺物は裏面に布目瓦痕がある）を挙げるが、既発見に曲線頸三重弧文字瓦があり、複弁七葉蓮華文鏡瓦の組瓦となる。同系に関し、大江氏は「山王・秋間系複弁七葉蓮華文鏡瓦」は放光寺（山王虎寺）の創建に伴い単弁八葉鏡瓦よりや、後出して焼造されたとされ、その複弁七葉を祖形としてそのほか乗附古窯跡群（高崎市観音山丘陵）で焼造され、主要供給先を群馬郡・片岡郡・多胡郡・碓氷郡の四郡内の国分寺建立以前の寺院・官衙ないし官衙的施設にあてたというが、当散布地近くには、小字三角の地名があり、三角は御角（帝）で公に通じ、ひいては都衙などの官衙の存在を示唆すると推測された尾崎喜左雄説がある。他に、採集遺物として土師器台付壺、須恵器坏、薬壺形の短頸蓋などがあり、同蓋の多さは注目される。まとめれば、瓦の存続年代は8世紀初頭～9世紀にあり、鬼瓦が特記される。



1～3 體瓦、4 鬼瓦、5・6 男瓦、7～12 女瓦、13 異形品、14・15 土師器杯・台付甕、以下33青磁鉢13・14世紀泉原磁手を除き、須恵器。22手持笥削、23余切周辺回転籠、24・27籠起、25余切、26回転籠。1背面撫、2背面布目、3背面布目、4裏面撫、5罫目撫削、6素文、7～9回転素文、表面寄木圧痕、10～12罫目。胎土は、1・2栗附(横香山丘陵)、3秋間、4栗附、5・7・8・11・12秋間、9栗附、6・10栗附か秋間窯跡群製の胎土に見える。14・15西毛製、16・22秋間・栗附18・20・23・29・30秋間、24・28・31栗附、32秋間・藤岡、17・19・21・25～27西毛製の胎土に見える。時期は1が複弁七葉で8世紀初頭、2が8世紀中頃、3は9世紀初頭、古様は14を除き、18・22など8世紀初頭から新様は32の10世紀頃。

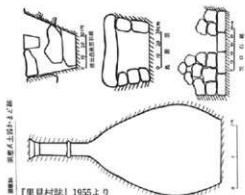
第13図 奥原散布地遺物図

⑥ 里見廃寺



遺物の分布は、集落と思える(古墳時代を除く)、8世紀～10世紀の遺物の分布域は、台地の成りに沿って約500mに亘って存在する。瓦の散布地も、それに合い広い。

第14図 遺跡位置図



「里見村誌」1955より

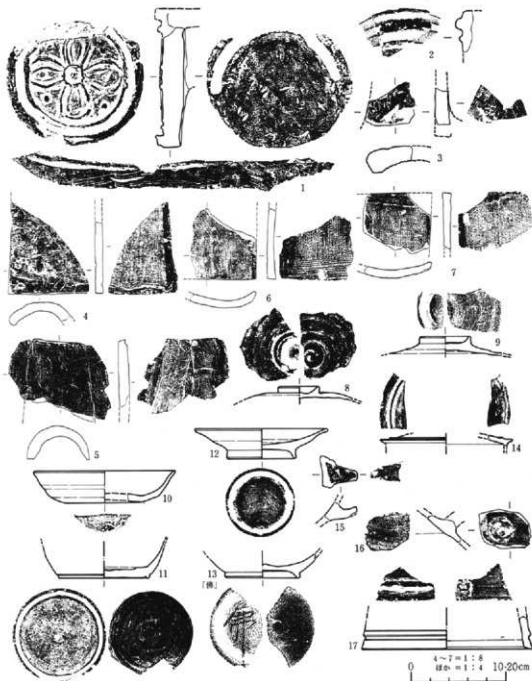
第15図 須恵器罎



上図は1982年、原570番地において町道神山～岩下線の拡幅工事が行なわれた際に、記録した。瓦散布の密な地域に近接した箇所であり、集落と廃寺との関係の一部が知れる。なお断面図中の点線は浅間山B群石層(12世紀初頃)である。

第16図 町道拡幅による土層断面

本遺跡は群馬県榛名町大字中里見字甲原558番地ほかにあり、上里見から下里見に至る里見台地のやぶ北寄りの標高197mに位置し、瓦類を多量に含む遺跡で、相接する557番地(標高198m)をはじめ、広域に亘る瓦・土師器・須恵器などの散布地を擁し、南辺には古信州街道が通り、南側の谷一つ隔てた丘陵の向う側には安中市下秋間の八重巻・東谷津の窟跡群地帯がある。隣接地域の調査例に山崎義雄「群馬県里見須恵器窟跡」(541番地内)『日本考古学年報』1954(15図)があるが窟跡は否定されている。1981年現地踏査を行った際発見した里見廃寺跡からは、高崎市栗附系、安中市下秋間系の瓦胎土の一群を採集したが、当時進められていた古信州街道の拡幅工事による切取面には平安時代の住居跡の断面(第16図)が認められたほか、排土中から収集した土器類には、底部に「佛」の墨書銘のある酸化須恵器(内黒)第17図13、削出高台の須恵器同図11などが見られる。なお、その後同所において8世紀後半頃の赤丹四葉鏡瓦同図1を採集したが、これらの遺物類年代観の中は瓦の時代を遡る8世紀前半～10世紀が与えられ、その間に瓦葺建物が存在し、宗教活動が行われていたのであろう。



1～3 雄瓦、4・5 男瓦、6・7 女瓦、8・9 須恵器坏・地蓋、10 須恵器坏、11 須恵器境、12 須恵器高台皿、13 須恵器轆化内黒埴、14 須恵器短面壺蓋、15 須恵器（埴か）把手、16 須恵器瓶把手、17 須恵器内面硯。1 は上野国分寺（史跡整備調査）に同范瓦があり、単弁四葉珠点中房。2 は単弁五葉珠点中房で、秋間窯跡群製に見える胎土、3 も共通する。4 は素文、5 は縄目後無、6・7 は縄目であり、秋間、栗附（観音山丘陵）製の両者の胎土が存在、10 は永切、11 は厘割・削出。12・13 永切。各胎土は9・10・11・15・17が秋間窯跡群製に通じ、14・16が栗附（観音山丘陵）窯跡群製に見え、12・13が不明。時期は1・2が8世紀末から9世紀初頭、4～7も同様。土器類古様は11が8世紀前半、13が10世紀後半で新様。

第17図 里見虎寺遺物図

⑦ 乗附鹿寺

高崎市乗附町字宮尾根にあり、標高150mの丘の南寄りの位置しており、既報告の尾崎喜左雄「群馬県高崎市乗附鹿寺址」(『日本考古学年報2』1949)によると、第19図1・2の瓦類の採集と、造り出しのない三基の礎石の存在を確認したとある。現在は、レストラン建設により推定中樞部および礎石類の確認は困難であったが、推定中樞部南西面・南東面の畑地に須恵器・瓦などが散布する。また、前出の既報には南東面の道路開削による切取面に住居を確認しているが境採集



観音山丘陵の一丘陵の端部に近い尾根筋に位置する。中樞部は最高所にあつたと考えられるが、レストラン建設によって失われた模様。以下低低斜面に至るまで遺物の分布は緩き、急斜面になり、急に薄くなる。生活遺物を含むため、住居跡もしくは小集落で存在するであろう。

第18図 遺跡位置図

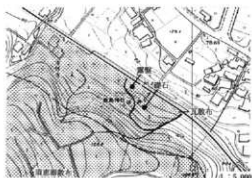
遺物は瓦類をはじめ、須恵器は坏・埴・甕・羽釜、土師器壺、灰釉陶器埴・皿・瓶子、緑釉陶器埴、羽口、鉄滓、工具用刀子などがあり、レストランに近付くほど瓦の散布量は多くなる傾向である。瓦類には、平瓦表面に織物様(真麻目状)布目の疋痕を持つ第19図12が含まれる。同一用法による生産地限定に援用となるが、これら遺物の製作年代は9世紀代～10世紀代にあてられ、瓦葺建物の存在と、これに関わる者の生活用具、さらに羽口は建築用釘など製作と或は佛具の修補に当てた可能性があらう。



1～3 雄瓦、4～6 男瓦、8～12 女瓦、13～16 須恵器、17～19 灰釉陶器、20 緑釉陶器(須恵質)、21 羽口。7～12 乗附鹿群の胎土。13～15 同前。16 古井・藤岡以南の胎土。1～3 は9世紀。7～12 は9～10世紀前半。13～15 は9世紀後半～10世紀前半。16 は10世紀。17～19 は9世紀末～10世紀。瓦類の上限は1・4が9世紀前半頃、下限は11・12が10世紀前半頃。このほか直径約8cmの鉄靴形鉄滓、種不明の粘土塊あり。

第19図 乗附鹿寺遺物図

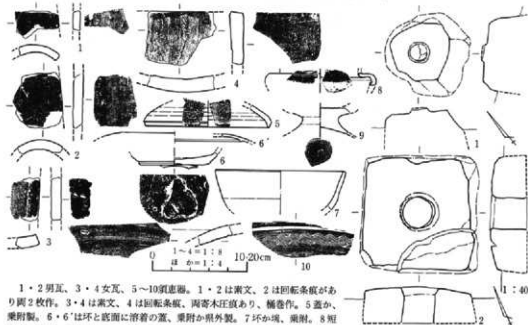
⑧ 鹿島神社散布地



図中を斜めに横切るのは上信電鉄線である。上図トーンは須恵器の散布地を示したが、この中に散基の小古墳が存在し、その遺物かもしれない。瓦の散布地はこれの中にあり、図中央線がそれである。量は少ない。東西地形に注意。

第20図 遺跡位置図

て考えられ、鹿島神社の持つ軍事的に通じた性格に対し、奈良時代における上野国の物部氏族、同一丘陵所在の金井沢碑銘文中の「物部君」系の存在などの立場から考えれば、必然として有機的な関係が想定される。これに関わる考古史料では、園分寺出土銘文瓦「山字物マ(部)子成」があり、山字は『和名抄』所載の「多胡郡山字也末奈」で、物マは物部と解釈され、山字の地は現山名に当たると考えられ、この地に接する鹿島神社は注目し値する。



1・2 男瓦、3・4 女瓦、5～10 須恵器。1・2は素文、2は回転条痕があり筒2枚作。3・4は素文、4は回転条痕、陶寄木正旗あり、桶巻作。5蓋か、栗附製。6・6'は坏と底面に滑着の蓋、栗附か鼎外製。7坏か碗、栗附。8短頸壺、栗附。9 脚付盤か、栗附。10大壺、栗附。1～4は8世紀前半、5～10は7世紀後半から8世紀前半。上野園分寺前代の遺物類が多く、近接古墳の時期が問題である。瓦類は栗附(観音山)窯跡群製の胎土に見え、厚手で古樸。

第21図 鹿島取神散布地遺物図

高崎市根小屋町字鹿島鎮座の鹿島神社は主祭神に武甕槌神を祀り、標高約100mに位置し、およそ600㎡規模の境内南東隅に輝石安山岩製礎石が据わり、中央部や北寄りに天引石製塔石製露盤がある。境内地はかつて8世紀代の古瓦類の採集が行われ、境内東接の桑畑には瓦や、土器類が、境内西辺に接する鹿島山宝寺寺地内においても須恵器類が散布する。さらに、神社の南西～西側の標高130m付近までの範囲には比較的多量の土師器・須恵器が散布する。こうした状況は、現鹿島神社の地は基本的な諸堂を配した古代寺院跡として

第22図 同散布地石製遺物図

1は硬質安山岩か、出柄と柱礎を造出し、厚みあり、塔礎石か、柱礎48～52cm、2は砂岩製、塔露盤、芯孔30cmを測る。

⑨ 馬庭東虎寺



第23図 遺跡位置図

りにおいては寺域造成のための破壊行為が及ばず、それが瓦の散布状況に適合するなどの条件も有しているからである。但し、東西辺の一部は家混みのため踏査不能状態にあった。また聞き込みにおいても上記を上回る成果は挙げられなかった。

遺物類では既出例に複弁七葉蓮華文鏡瓦第25図1に、抽象文大形鏡瓦同図2、重弧文字瓦同図4、男瓦（表面に正格子印がある）、女瓦（表面青海波、裏面に長方形格子印および正格子印）がある。また採集品としては男瓦（表面平行印、長方形格子印）、女瓦（表面布目、裏面平行印）などが上げられるが、いずれも紐作り技法である。

このほか、採集した遺物は、須恵器、土師器、灰釉陶器、軟質陶器などで、それらの時期は8世紀～10世紀頃と考えられる。

馬庭東虎寺採集の遺物で特に注目されるのはやはり、複弁七葉蓮華文鏡瓦と、抽象文大形鏡瓦の存在にあり、馬庭東虎寺を多胡寺と推定する大江正行説に「多胡推定地区に接近し、なおかつほぼ同じ頃（雑木味散布地）を創建とする大規模な古瓦散布地を求めると馬庭東遺跡が該当し、地勢・地縁その他の条件からしても可能性が高い。瓦類からすれば8世紀中頃と考えられる抽象文大形鏡瓦が、雑木味遺跡と同様にあり、両例ともに、ある程度大きな建築物が示唆される。」がある。これは現状の瓦散布範囲とも符合する。



1～4 須恵器。5～6 灰釉陶器。1 盤状、2 小形壺、3・4 瓶、5・6 瓶か。1 はやや酸化気味、焼成軟、粗質、底面に板状の圧痕あり、時期不詳。2 聚附窯跡群製、硬質、灰色。3 粟附、焼締り、7・8 世紀、4 粟附か、軟質、8～10 世紀。5・6 輪部見えず、6 は端部が磨られているのか当初不明、10 世紀。環・塊類微弱で生活域は別地に存在を示唆する。

第24図 馬庭東虎寺遺物図



第25図 馬庭東鹿寺遺物図

⑩ 同慶寺と宮ノ西散布地



▲上図は現多胡碑位置の西接地域である。同碑の所在する場所は川原石が累々としており、かつて河川城のようである。西方はやや高所であり、瓦をはじめとする散布地が広がり、南側に大宮神社がある。その北接地は瓦類が多く、郡衙の中心施設を想定して、同社は有縁であろう。

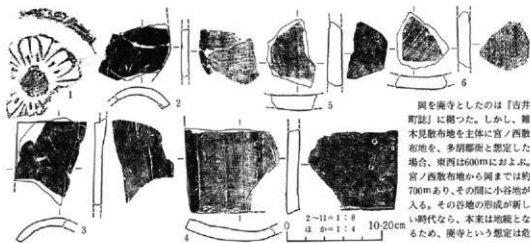
第26図 遺跡位置図



▲上図は山崎一「群馬県古城址の研究下」1972を使用した。左図と縮率は異なるが、小字御門の北接地がその地で、現在でも堀切堀が認められる。第28図23が中世遺物である。

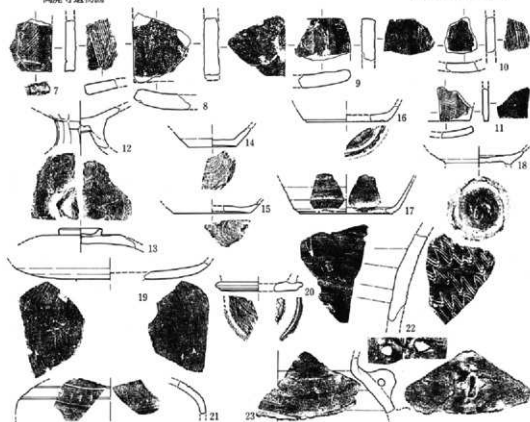
第27図 池城跡

多野郡吉井町大字池字岡に所在する同慶寺は、鏡川右岸の河岸段丘上に標高104mに立つ国指定史跡「多胡碑」の南方500m、標高106mの段丘上に位置する。中世にはこの遺構を利用した池城第27図が構えられ、近年まで源塚などの遺構が残っていたが、現在平夷されている。既知の遺物として礎石・複弁六葉蓮華文鍮瓦が伝えられるが、礎石では同地内ほぼ中央の北寄りに平面を露頭しているのが見られるほか、2個の大石（礎石）が掘り起されて庭の一隅に寄せられている。



岡を南寺としたのは「吉井町誌」に拠った。しかし、難本見散布地を主体に宮ノ西散布地を、多胡郡南と想定した場合、東西は600mにおよぶ。宮ノ西散布地から岡までは約700mあり、その間に小谷地が入る。その谷地の形成が新しい時代なら、本来は地蔵となるため、南寺という想定は危うくなるかもしれない。

岡南寺遺物図



岡南寺の土器量は微弱で瓦の採集量は多かった。宮ノ西散布地の土器が多いことと対照的である。岡南寺について、1複弁六葉龍瓦、2隅高し男瓦、3有段男瓦、4素文女瓦、5平行甲女瓦、6羅目女瓦。2・4・5吉井窯跡群製。3兼附、6兼附か。1・3は8世紀前半、2・5・4・6は8世紀前半～後半。宮ノ西について7指輪重弧文瓦。8・9素文女瓦、10羅目女瓦、11素文女瓦、12陶質土師器高坏、13須恵器蓋、14・15同坏、16・17同坏、18同敷化地、19同蓋か桐付盤、20同钵、21同短頸壺、22同大甕、このほか葉片が目立つ、23中世軟質陶器釜形。1～10吉井窯跡群、11藤岡か、14吉井窯跡群、13・16・17・21～23兼附、15・19兼附・吉井か、18藤岡以南、20県外輸入。7～11は8・9世紀、12～21は8～10世紀。

第28図 岡南寺・宮ノ西散布地他遺物図

今回の採集遺物は男瓦、女瓦で、女瓦のほとんどに横骨痕が認められる。これらの遺物による当該年代は8世紀～9世紀初頭と考えられる。なお、現在同地西側は町道拡張工事中である。

一方、同大字池字宮ノ西の散布は「多胡碑」の西方約200m、字大宮標高105mに鎮座する大宮神社の北側にあたり、字宮浦・伊勢森・中井および、字上河原・北久保に亘る須恵器を主とした散布地で、吉井町誌所載の下池古墳群地帯（現在4～5か所に痕跡が認められる）でもあり、大宮神社裏から推定飛鳥時代頃の鵝尾が発見されたと伝える。踏査による採集遺物は瓦類、土師器、須恵器鉢・短頸壺・埴、灰釉陶器境に軟質陶器などが上げられ、それら遺物類の存続年代は8世紀～11世紀、14世紀にあてられる。

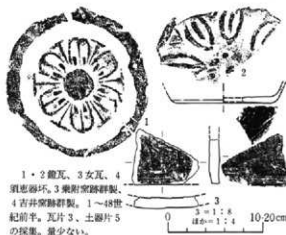
後出の同大字池字雑木味を含め、同鹿寺における「山王・秋間系鑑瓦」を祖系とする複弁七葉蓮華文鑑瓦・複弁六葉鑑瓦を見ることは、前項、馬庭東鹿寺を合わせ考えれば多胡郡の建郡に有機的関わりが想定されるのである。「和名抄」所載の大家郷は、吉井町大字池、同本郷の地に凝定されているが、建郡の碑とされる多胡碑は小字御門の地に立ち、御門は帝に通ずること、また小字大宮には官衙の守護神的性格をもつ大宮神社鎮座などから郡家の所在地として推定されている。しかし、多胡碑を建郡の碑としてとらえた場合、現在の所在地は段丘の変換部に片寄ること、雑木味の近く、吉井町大字本郷に小字名称三角と多胡碑旧地論など流動的な要素もあるなど広い展望から見れば、大江正行氏のいう「多胡碑周辺の古瓦散布地を直接の郡衙関連地に考えている。」の説に妥当性が認められ、雑木味散布地を含めて多胡郡衙とすることも無理は生じない。

⑪ 雑木味散布地



多胡碑の立つ御門の地と、大字本郷字三角の間に当り、600～647番地内に亘り古瓦既出。北辺に沿う段丘の変換部には遺構・遺物が見えない。

第29図 遺跡位置



1・2 鑑瓦、3 女瓦、4 須恵器杯、3 兼附室跡群製、4 吉井窯跡群製。1～48世紀前半。瓦片3、土器片5の採集。量少ない。

第30図 雑木見散布地遺物図

鍋川右岸の河岸段丘上現標高113m、多野郡吉井町大字池字雑木味に所在、1933年雑木味地内新田開発の際、複弁六葉蓮華文鑑瓦、重弧文無額字瓦をはじめ多量の瓦類が採集されたほか、礎石類の存在も伝えられるなど広大な散布地と見られるが、現状は大半が水田地帯であるため採集は不可能に近い。既出瓦などからの年代は8世紀におかれるが、山王・秋間系複弁七葉蓮華文鑑瓦を祖形にする複弁六葉蓮華文鑑瓦の存在が目。前出推定多胡郡衙の所在地。

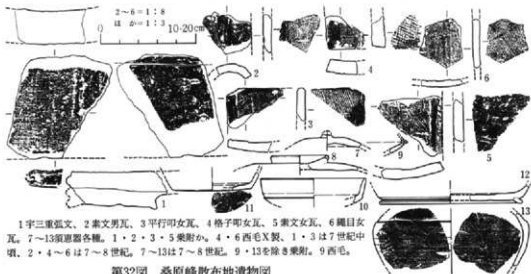
⑫ 桑原峰散布地



当散布地の南北を擁する谷地崖は可能な限りの観察を行ったが、窯跡に結び付く遺物は発見出来なかった。また県道へ隔てた東側の丘陵は、縄文土器以外は見当らず。

第31図 遺跡位置図

周辺には圧倒的に瓦類が多く、この北側の散布量は極度に薄く、そのほかは多量の須恵器類を主として、土師器、瓦類(少ない)、灰胎陶器などが散布する。また、南北に控える谷地水田でも僅少の瓦・須恵器類の散布を認めたが、丘陵南北を擁する傾斜面と谷地崖は一部荒地化しており充分な観察は行えなかった。西方の標高219m付近では遺物類は極度に減少する傾向にあった。なお、散布地の北東面では現代瓦製造のための粘土採掘が行われている。また周辺地域の調査例として、「桑原峰遺跡群」が刊行されており、瓦類微量の出土例が見られるが、窯跡に関わる遺構・遺物類の報告はされていない。こうした状況の中で採集した遺物類で最も注目されるのは瓦類であり、第32図1の長段額字瓦は上野国内最古に近い手法としてとらえ得る要素をもち、同時に採集された変形印第32図3と合わせて極めて貴重な存在である。これらの遺物からみた当地域の性格は生産窯跡とするより、7世紀中頃の寺院跡として考えることに妥当性を感じる。



1字三重弧文、2素文男瓦、3平行印女瓦、4格子印女瓦、5素文女瓦、6縄目女瓦。7~13須恵器各種。1・2・3・5乗附か。4・6西毛X製、1・3は7世紀中頃、2・4~6は7~8世紀。7~13は7~8世紀。9・13を除き乗附。9西毛。

第32図 桑原峰散布地遺物図

⑬ 浄法寺遺跡



▲1はスサ入り機土塊の既出が多量にあり、地元民の語しでは窠らしい印象を受けるが、基盤層は陶土ではなく、疑門が持たれる。トーンは瓦散布地域である。現浄法寺は東面の構造をとる。

第33図 遺跡位置図

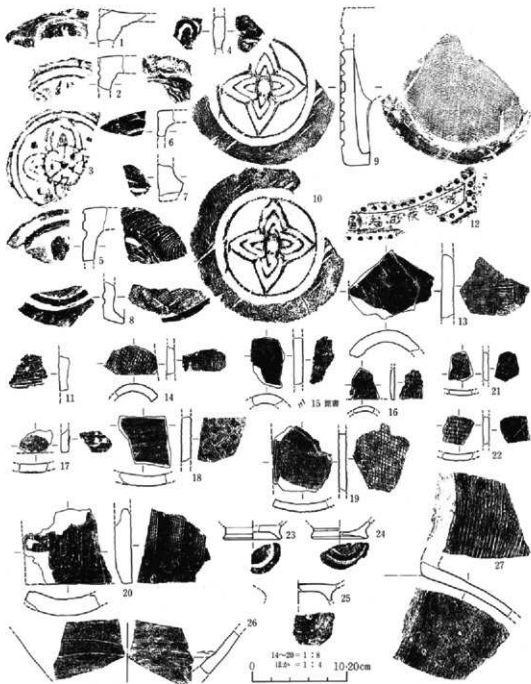
多野郡鬼石町大字浄法寺字平1094番地(現浄法寺)内にあり、標高124m。緑野寺跡とも称され、県道藤岡鬼石間の浄土院浄法寺地内の北半分から、墓地、相輪本様の周辺へと古代瓦・中世瓦の散布は広がる。浄法寺は古くは緑野寺・緑野教寺とも称し、平安時代初期天台宗の開祖である最澄により開かれた天台宗東国布教の中心道場のあった所である(緑野寺伝は道忠禪師の創建を伝え、『元亨釈書』による道忠は、天台宗の開宗に先行し延暦七年(788)頃東国布教につくしたと記す)。最澄は弘仁九年(818)「六書宝塔願文」を発して、日本国中に六カ所の宝塔院(天台宗法華院)を造営、各塔にはそれぞれ一千巻の法華経をおさめ、その功德を求めるという理想実現に向け、六カ所の一つとして「東方安鎮 上野宝塔院」を緑野寺に置いたが、このときに建てられたのが、現相輪本様の前身である。さらに下って中世には、応永三年(1396)書写、日光輪王寺蔵「大般若経巻四九一・四九二」²⁹⁾に「上州浄法寺別当坊」名の記載が散見される中世寺院の存在も明らかであるが、戦国時代には館に変容し、天文二十一年(1552)には山門を除くすべての建物が灰燼に帰している。これら事実関係を證明でき得る資料に採集した瓦類がある。古代瓦のうち米格子・正格子をもつ瓦類は現寺域の北東四半分の位置から採集し、他はすべて墓地周辺である。この中で多様性が見られる鏡瓦類第35図1は上野国で内初見の型式で、米字状格子、正格子瓦類と合わせて武蔵国との関わりを追及を要する。他に古代瓦では戒壇院銘をもつ字瓦は諸仏堂の存在を窺わせ、中世の巴瓦と、剣頭文字瓦が他勢力との関わりを示している。散布遺物の中には壘状の粘土が多量に見られ、前述の戦火の反映であろうか。



第34図 浄法寺館跡

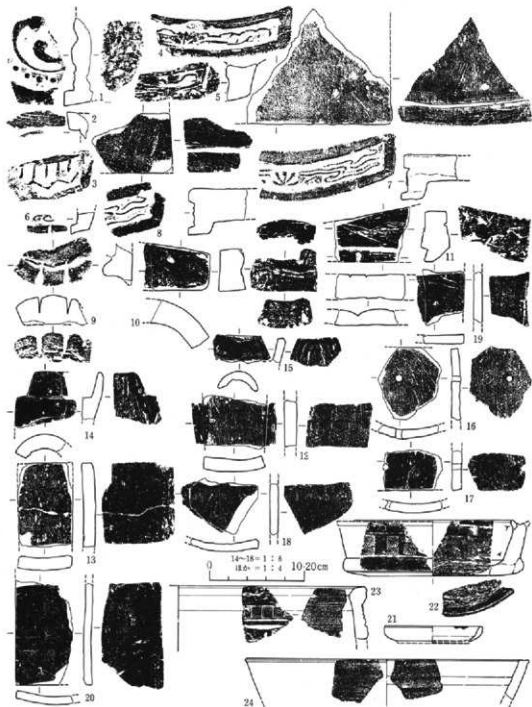
▲上図は山崎一「群馬県古城墓址の研究」1972を使用した。左図中の池の位置と上図右端の池の位置が共通する。現寺境内を主郭として館跡が推定されている。

◀古代・中世瓦は、現境内では採集量が少なく、北方の薬師堂周辺が基壇として掘り返されているため採集量は多い。中世瓦は西方の一段高い高所にも散布があり、鎌倉時代頃は東の池に接した西側から東西に長い散布界を見せるため、現浄法寺と同様に東面の伽藍がもたれたい。法壇は現在に至る。



1～10甕瓦、12字瓦、13～16男瓦、17～22女瓦、23～27須恵器、23～25酸化。1・15吉井窯跡群以南、2・4・5・6・8藤岡窯跡群以南、16・21・22片岩粒入り藤岡窯跡群以南、13・20栗附窯跡群以南、14笠懸窯跡群の群馬・埼玉X、7・17～19群馬・埼玉X、23～25片岩粒入り藤岡以南、26栗附か埼玉X、27吉井。1は8世紀前半、2・3は8世紀後半～9世紀代4～10は9～10世紀。1・14・18・19は8世紀前半。13・15・20は8世紀～9世紀前半。16・21・22は10世紀頃。23～25は10世紀代。26・27は8～10世紀頃。埼玉県側からの搬入が多いと見え、混在状態にあることは誤りない。創建（二次利用がなければ）1・14・18・19など8世紀前半が古い。12は引用であり、古代の中世か判然としないが成層的存在を示す。

第35図 浄法寺遺跡遺物図（古代）



1・2 鉆瓦、3～8 字瓦、9 飾部瓦、10・11 道瓦、12・13 同型斗瓦、14・15 男瓦、16・17 女瓦（釘穴あり）、18～20 女瓦、21 土師質土器皿、22 軟質陶器鉢（中世墳）、23 軟質陶器火鉢（備後）、24 軟質陶器内耳銅形。22・23 兼附か、21・24 胎土製作地不明。3 は14世紀前半頃、4～8 は14～15世紀頃、12・16～18 は13世紀前半頃、21 は13世紀頃、22・23 は14世紀頃。14 は15・16世紀頃。中世遺物は鎌倉時代から中世後半まで通して存在し、その法燈は現在に続く。

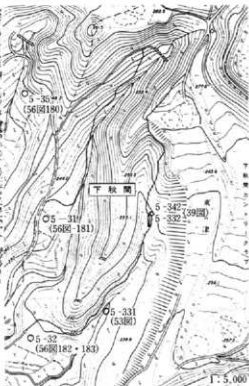
第36図 浄法寺遺跡遺物図（中世）

⑭ 東谷津窯跡支群



第37図 遺跡位置図

▲上図は『群馬県史資料編2』（原始古代2）1986中の挿図を部分使用した。その後、1988年に安中市教育委員会により、分布調査が行われ、現在では50ヶ所以上の支群単位が推定されている。
 ▶東谷津から八重巻に至る地区は、秋間窯跡群中、最も集密の場所の一つで、5-31以西の丘陵には、遺物の少ない個所は水田帯のみと云った状態で、7世紀後半～9世紀の遺物散布がある。



第38図 東谷津窯跡支群周辺地形図

安中市下秋間字東谷津の杉林中に発見した本窯跡群は標高約230mの谷底と、標高約240mの杉林との間の比較的急斜面の下に埋没している。発見の切掛は1991年3月7日の現地踏査にあるが、当初この地区は群馬大学による既調査地内に該当すると考え、踏査予定地から除いていたが、自分の目による現地検分を試みていた関係から現地踏査を実行したところ、沢の底およそ20mに亘り多量に散乱する瓦類・須器類を発見するとともに、第39図のような陥没状態を確認した。

そこで、所在地名称に因み東谷津窯跡支群の名称を与えたのち既調査による八重巻窯跡との位置関係に疑問を抱いた。八重巻窯跡の所在地は本窯跡がのぼる丘陵を経た沢一筋東に位置し、地籍を東谷津404番地としており、本窯跡と同じ粘土層を使用していることが判明した。したがって、八重巻窯跡群に関わる東谷津窯跡支群と命名すべきであった。

さて、次に本窯跡とその周辺の概略であるが、窯跡群東谷津の河川崖の東側の急斜面を杉林へのぼるが、雑木、草、落葉に覆われるため詳細の確認・記録は困難であった。したがって第39図概念図は見えるままにスケールをあてた記録であって、正確な窯跡群や、遺跡地の状況把握にはつながらないが、窯跡群を覆う表土・土層は全面に多量の炭化物を認めるが、これには高位置に築かれた炭焼窯の影響も推察される。

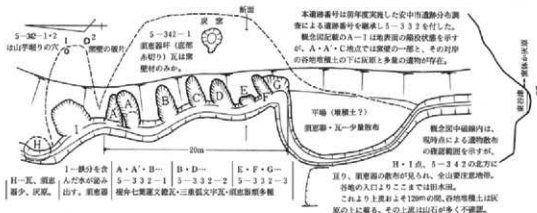
一方、沢の中には窯跡と思われる凹地A'AB、CD、EFGの3ブロックに分かれ、しかも山

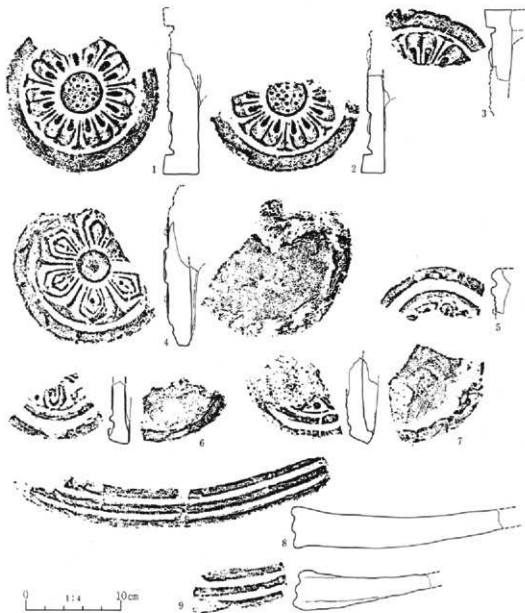
積するように須恵器・瓦類が多量に散布しており、須恵器中には回転篋削りおよび糸切りを施された底部を有する環類混在のほか埴・大甕・坏蓋・短頸蓋類があり、瓦類では複弁七葉蓮華文鏡瓦、三重弧文字瓦などのほか、表面に模骨痕を有する女瓦が多いが、中には裏面に格子叩きを部分的に認める遺物もあった。縄叩き痕を持つ瓦類は極少の現象である。さらに、これらの遺物を採集し、沢底の流木・落葉を除去したところ各陥没部分に窯体の一部が認め得るようになった。この現象は沢の上流に位置するA・A'が顕著で、瓦使用の窯壁保護材や、窯の前面にあたる沢の西壁の下層約2mに埋没する灰原中からも多量の須恵器・瓦類を採集した。

灰原中の須恵器では底部篋削りによる坏、三段重ね状態の埴、高脚付盤などのほか、裏面に描きの二文字「?程」のある不明器種が特に注目されるが、現状で判断すればA窯が瓦類、A'窯が須恵器類用に考えられる。またA'左手位に見える30cm×40cmの巾に深さ70cm程の山芋掘りの穴は下層に灰層があり多量の須恵器類、糸切り底部の坏・坏蓋と少量の甕類が認められ、瓦類は窯壁保護材に用いていたようである。なお、概念図中に記す下流の末尾の所より上流120m程の距離内に当たる窯側の傾斜面と谷地帯はすべて灰原埋没の状況を呈している。

このような大規模な窯跡群をなす中において最も重用な意味合いは「山王・秋間系鏡瓦」の初様となる複弁七葉蓮華文の焼造地の発見(A)である。山王廃寺は出土の文字瓦から「上野国交替実録帳」(定額寺)や、山の石碑銘に見られる「放光寺」に比定されさらに、山の山銘文によれば放光寺天武天皇の681年には既にその存在を認める寺院であり、その創建に用いられている鏡瓦の一種にあたる複弁七葉蓮華文鏡瓦である。したがって、当東谷津窯跡支群は七世紀後半には操業の事実が認められ、現時点では、上毛野君氏族の建立の状況を有する、西上毛野(西上野)連合寺院組織の頂点に立つ放光寺(山王廃寺)建立の実態に迫ることのできる生産跡とされて、重要な遺跡の一つである。さらに西方の谷一つ隔てた八重巻地区において複弁七葉蓮華文鏡瓦片第56図180が採集されており、改めて、その規模の広がりを実感し得た。

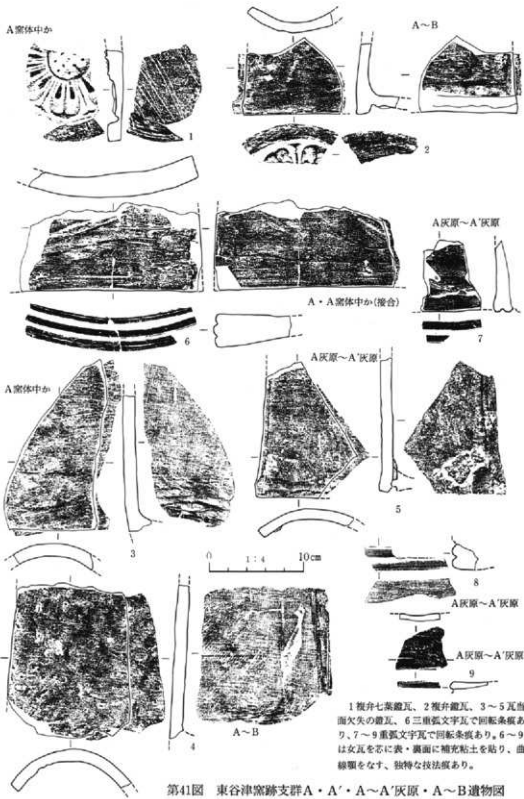
なお、当東谷津山林中の谷地帯入口付近においては上野国分寺出土例に見られる鏡瓦第53図141の採集があったのも見逃せない成果であった。



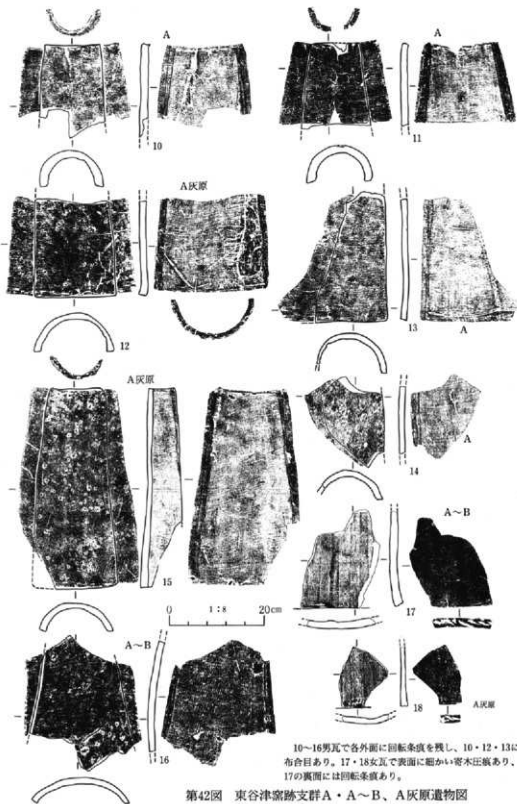


上図は田島伊作氏が自宅前で耕作中採集の瓦類である。八重巻3960周辺である。1～3複弁七葉蓮華文鏡瓦。4単弁六葉鏡瓦。5～6単弁五葉鏡瓦。8、9三重弧文字瓦。4は硬質で灰色のほか、各芯淡褐色、外面側淡灰色、軟質気味である。1～3背面無整形、1・3男瓦直接の接合。4背面布疋痕、部分周縁、荒削。6・7背面布疋痕、背面周縁あり。8・9重弧文は回転施文、女瓦は横骨柄の寄木疋痕あり。外面回転条痕あり。女瓦との接合関係は9の断面のように、表面側にも、粘土を貼り、場合によっては厚く補充の粘土を貼ることを特色とする。1～3は7世紀後半中頃。4は8世紀中頃。5～7は9世紀初頭頃。8・9は7世紀後半頃。田島氏宅前の採集地は、大形硬土塊を含んだ層が30cm以上堆積しているのを耕作断面で確認している。このほか、後述の大形格子女瓦の存在も確認している。田島伊作氏は、郷土の文化圏に心を砕かれ同地出土瓦について『雄木郡秋間村の古瓦発見記』〔上毛及上毛人209号〕1934で紹介された。氏は第41図1・3の複写写真を用い、同瓦が前橋市総社町所在の山王庵寺（放光寺）と瓦と酷似し、奈良早原原寺鏡瓦とも似ているとの意見を下した。昭和9年のことである。氏の見解は正しく、今日でも同瓦が栗原寺以前（持統朝）であることに変わりなく、群馬県内では考古学上の方法から寺井庵寺（天武朝か）の複弁七葉鏡瓦より後出することが明らかとなっている。

第40図 八重巻既出瓦図

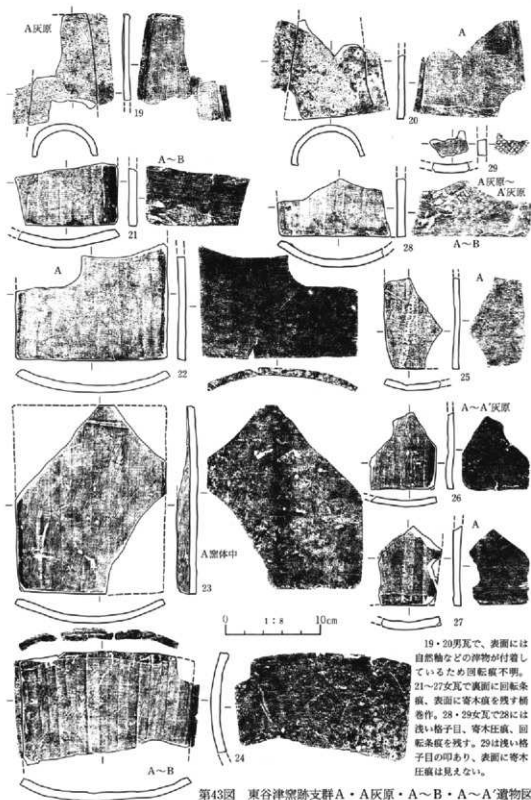


第41図 東谷津窯跡支群A・A'・A~A'灰原・A~B遺物図



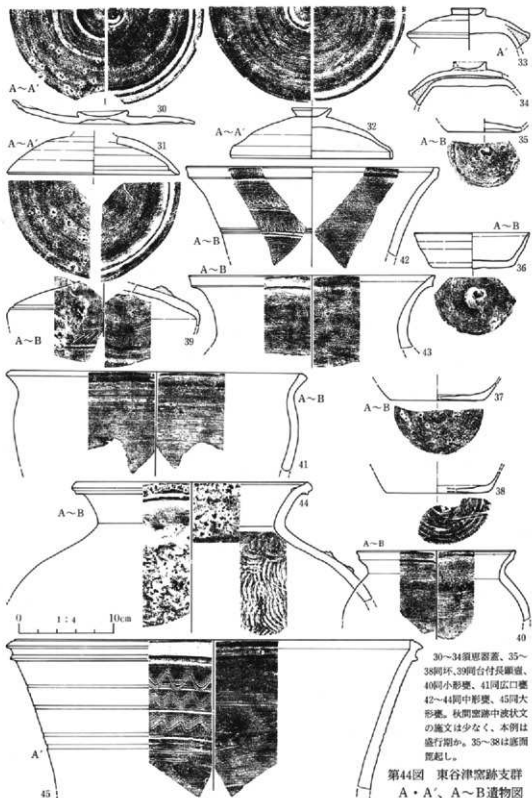
10~16男瓦で各外面に回転条痕を残し、10・12・13に布合目あり。17・18女瓦で表面に細かい寄木瓦痕あり、17の裏面には回転条痕あり。

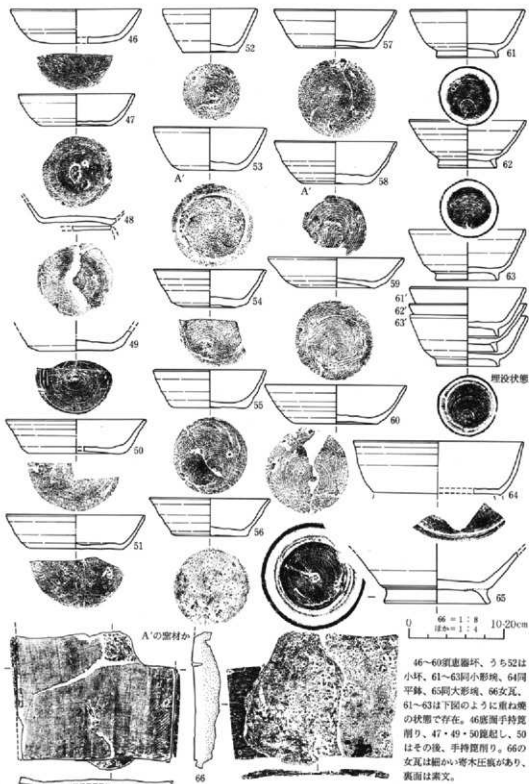
第42図 東谷津窯跡支群A・A~B、A灰原遺物図



第43図 東谷津窯跡支群A・A灰原・A~B・A~A'遺物図

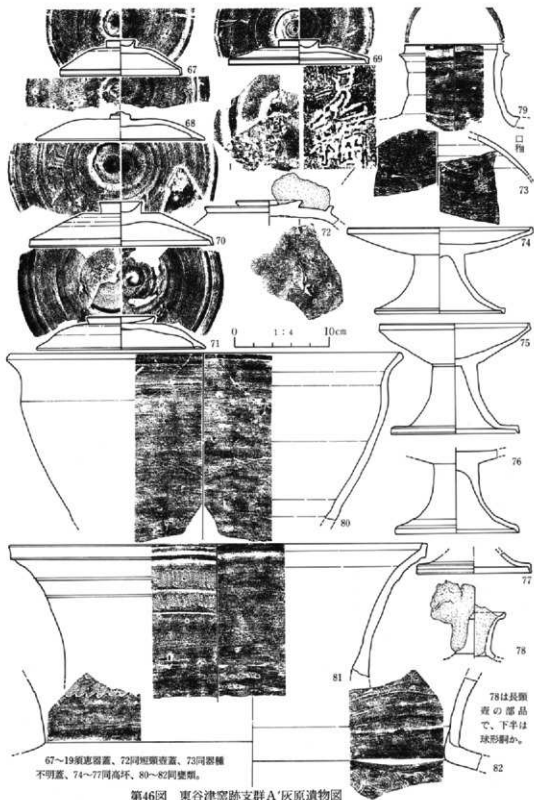
19・20男瓦で、表面には自然釉などの滑物が付着しているため回転痕不明。21~27女瓦で裏面に回転条痕、表面に寄木痕を残す樹巻作。28・29女瓦で28には浅い格子目、寄木圧痕、回転条痕を残す。29は浅い格子目の印あり、表面に寄木圧痕は見えない。



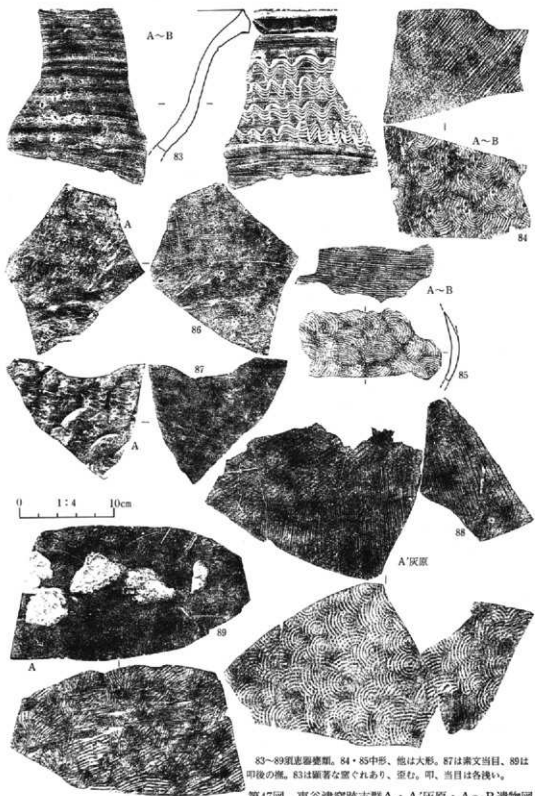


第45図 東谷津窯跡支群A'・A'灰原遺物図

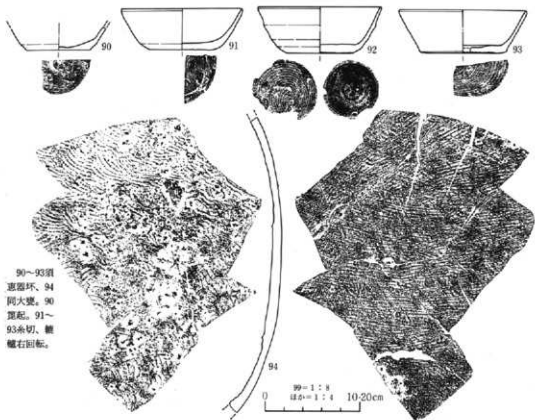
46～60須恵器鉢、うち52は
小鉢、61～63同小形碗、64同
平鉢、65同大形碗、66女瓦。
61～63は下図のように重ね履
の状態が存在。46底面手持足
削り、47・49・50踵起し、50
はその後、手持足削り。66の
女瓦は細かい寄木圧痕があり、
裏面は素文。



第46図 東谷津窯跡支群A'灰原遺物図



第47図 東谷津窟跡支群A・A'灰原・A~B遺物図



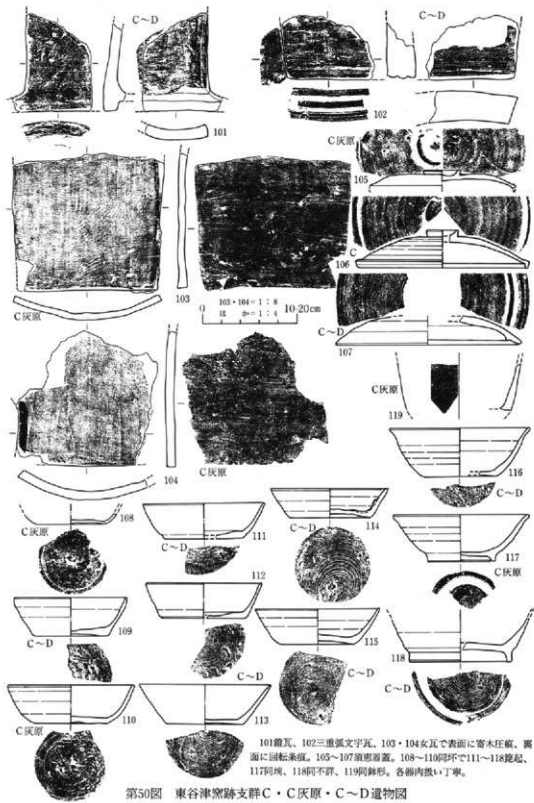
90~93須
恵器環、94
同大壺。90
蓋配。91~
93糸切、縦
横右回転。

第48図 東谷津窯跡支群 A'灰原遺物図



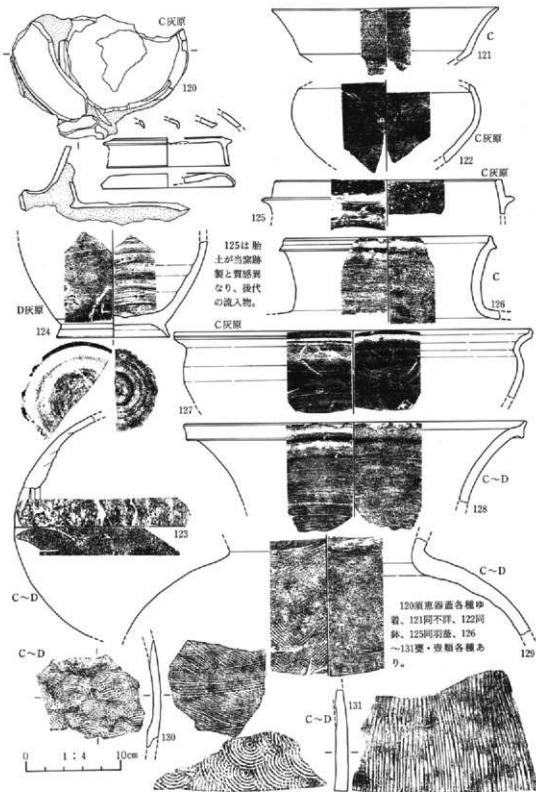
95・96筒瓦、96は複弁。97・98重
弧文字瓦、98は三重弧文で各々回転
条痕あり、97裏面に回転条痕あり、
そのため桶巻作。99男瓦、平行印が
外面にあり、杖間窯跡群製としては未
見であった資料で、継続性や量産の点
では疑問が感じられる。

第49図 東谷津窯跡支群C灰原・C~D遺物図

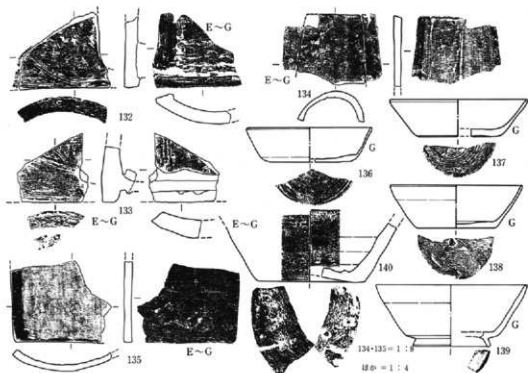


101釳瓦、102三重弧文字瓦、103・104女瓦で表面に寄木圧痕、裏面に回転糸痕。105～107須恵形蓋。108～110同坏で111～118挽起。117同地、118同不詳、119同鉢形。各器内散り丁取。

第50図 東谷津窯跡支群C・C灰原・C～D遺物図



第51図 東谷津窯跡支群C・C灰原・C~D・D灰原遺物図

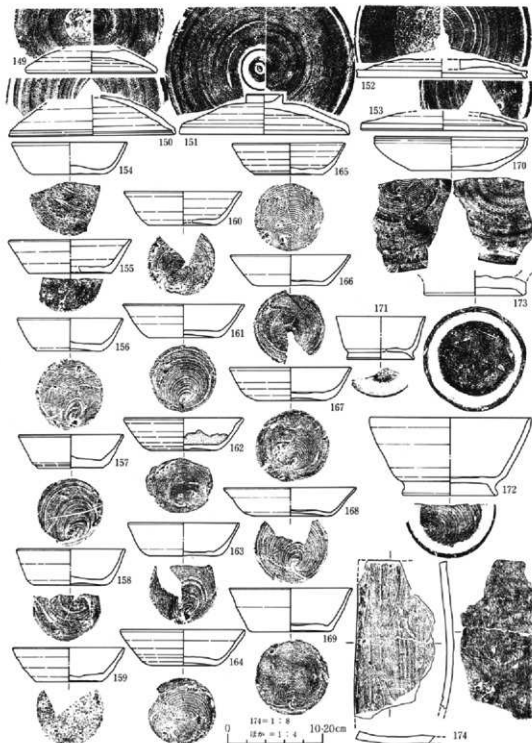


第52図 東谷津窯跡支群 5~331遺物図



132~135・141・142瓦類。141は単弁四葉重圓中房體瓦、外面周縁貼付、母小須惠器。136甕。146・147は台付短頭壺蓋、143・145は稀少種、148は瓶形。

第53図 東谷津窯跡支群 5~311遺物図



149～153 須恵器蓋、154～169同環、170同異形環、171同小形環、172同環、173同不明、174女瓦。154・155は底面手持腕部、環類の底面切りはなしに、轆轤石・左回転の両例があり注意を要す。174に斜格子、寄木柱痕あり補修作。

第54図 東谷津窯跡支群5～342遺物図



第55図 東谷津窟跡支群 I・不明遺物



第56図 八重巻地区表面採集遺物

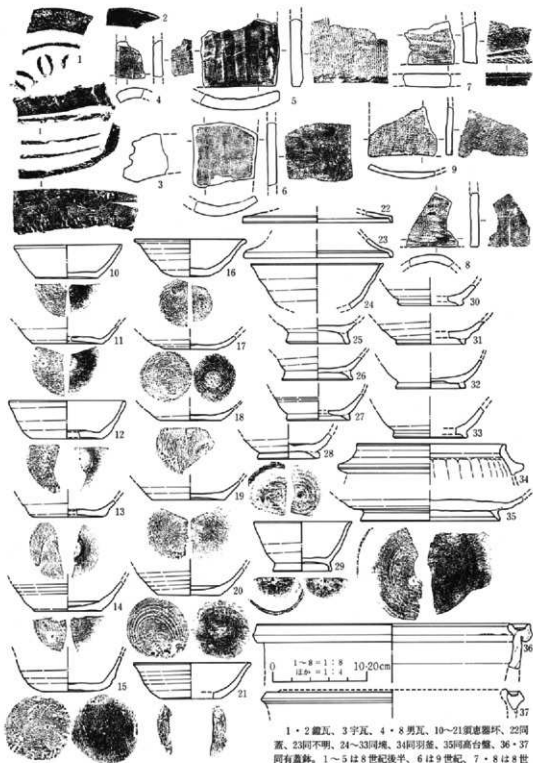
⑮ 小塚窟跡



第57図 遺跡位置図

現在小塚地区住民の使用する粘土は雁行川の対岸で採取するという。小塚周辺は他にも左近屋敷などの古瓦散布地が確認されており、さらに窟跡の存在を想定させる。

高崎市寺尾町字小塚2086番地にあり、標高145~150m附近に位置し、蛇行する雁行川の北側河川崖丘を県道金井-高崎線が通る。道路の北側20m程の所に第一河川崖と、第二河川崖間の傾斜地を利用した築窯を認められ、宅地造成による切り取り面に窟体ドームの切断面が露頭するが、1980年の現地踏査ではその南側の宅地造成による灰原を発見し、その周辺から本稿で紹介する宇瓦第58図3、女瓦第58図5・7・9などの遺物を採集したが、瓦・土器類のほとんどは前出の窯に伴うと思われる灰原から採集した。その後宅地の再造成で窟体に当たり、一基の窟体は切断面として表れ、その東側には2カ所程固い焼土などが見られ窟体存在の状況を呈している。なおこの位置から東へ約150m程に亘り巾30cmの緩斜面が続き、埋没窯の存在を考えるが関連遺物の採集はない。本窟跡灰原の採集遺物は鎧瓦、前出三重弧文字瓦をはじめ、須恵器環(糸切)、蓋、大甕を混じえるが、女瓦で特に注目させられるのは、第58図9で、女瓦表面に輻条様(莖目状)目の圧痕が付き、上野国分二寺の出土例、上野国府城採集例などがあり、この窟跡との関連が窺える。遺物年代巾は9世紀初頭~10世紀初頭前後。



1・2 鐵瓦、3 字瓦、4・8 男瓦、10~21 須惠器鉢、22 同蓋、23 同不明、24~33 同口、34 同別蓋、35 同高台盤、36・37 同有蓋鉢。1~5 是 8 世紀後半、6 是 9 世紀、7・8 是 8 世紀後半、9 是 9 世紀末~10 世紀初頭、10~15・18・20・21 是 8 世紀後半~9 世紀初頭、28・30・34 是 9 世紀末頃。

第58圖 小塚窯跡遺物圖

⑤ でえせえじ散布地



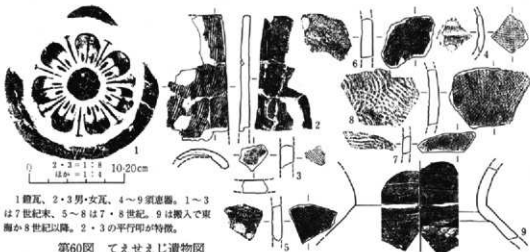
山ノ上碑入口の西方約300mに当り、山ノ上西古墳に近接し、古瓦の散布量は少ない。散布地の北側を北西方向に伸びる山道が、伝鎌倉街道で、既報による「でえせえじ麿寺址」は当散布地の北々西の山中に所在。

第59図 遺跡位置図

遺物で特出するのは、既採集品の複弁七葉蓮華文鏡瓦第60図1がある(前掲⑤項奥原散布地参照)。当地における「山王・秋間系複弁七葉蓮華文鏡瓦」の発見は、同一丘腹上に建つ「山ノ上碑」(片岡郡)跡に見られる「長利僧=放光寺僧」を介して直接放光寺(山王麿寺)へつながっていく。

現在、踏査は予定の半分も消化でき得ない状況下では遺跡の規模・性格に触れることは忍ぶに耐えないが、でえせえじ麿寺址・散布地を合わせて7世紀末頃の窯跡と考えている。

今後の補稿・報告を約しておきたい。



1鏡瓦、2・3男・女瓦、4～9須恵器。1～3は7世紀末、5～8は7・8世紀。9は輸入で東海か8世紀以降。2・3の平行印が特徴。

第60図 でえせえじ遺物図

高崎市山名町字山神谷の標高125～130mに位置し、東西に通る谷路、伝古鎌倉街道沿いの南側にあたり、緩傾斜をなす散布地(桑園)の南端に山名貯水池が横たわっている。散布範囲は比較的狭く、採集量も第60図1～9に示すように少ないが、地権者によると毎年4～5名の踏査者が来て瓦片を採集していくという。既報告に尾崎喜左雄「群馬県多野郡でえせえじ麿寺址」(『日本考古学年報2』1949)があり、それによると遺跡地の南側を伝鎌倉街道を通るとあり、位置的に相違点が認められ当地は散布地とした。山中を含む散布地周辺の踏査では麿寺・窯跡に直接関わる遺物発見はできなかったが、散布地の西側に北西方向から流れを運ぶ小沢があり、川底の随所に粘土の露頭が見られるなど、窯跡追究の継続踏査に期待をつないだ。

3. おわりに

以上各遺跡の概要と、それらの遺跡地で採集した遺物類を中心とした資料の紹介を行い、且それぞれの性格についての考え方を述べてきた。しかし、このような過去における一連の踏査活動により上げ得た成果に対し、一方においては大きな課題もあたえられた。まず収獲面として、

- 1 水沢廃寺…現在の水沢廃寺に伝存する鎌倉時代の十一面観音と、廃寺末葉の10世紀後半とは200年前後のひらきしかなく、現水沢寺の故地として考慮の必要性がある。
- 2 黒髪神社散布地…遺物量が少なく、性格については今後に継ぎたい。
- 3 唐松廃寺…榛名町大字白岩の長谷寺との関連で今後に継ぐが、同寺の十一面観音は11世紀代の作であり、本廃寺址盛期末葉と100年(次号に発表予定の中世遺物を加えるとその期間の1部は重複)のひらきしかない。
- 4 生原散布地…黒髪神社散布地なども共通する里地に面した散布地で、周辺集落との関連も検討を要する。
- 5 奥原散布地…群馬郡内の主体郷の寺院。主体郷は「久留未」郷であろうか。
- 6 里見廃寺…集落と寺院が関連づいて存在のもよう。なお、中世の武将里見一族の菩提寺であり、江戸時代初期には榛名神社の別当寺であった里見山光明寺縁起には寺の創建が11世紀の治安年間(1021~1024)とあり、本廃寺末葉の10世紀と大きな隔たりがなく、検討の要素がある。光明寺寺域とその周辺採集遺物は後日紹介の稿を起こす予定である。
- 7 乗附廃寺…観音山丘陵のやゝ大きめの台地上には、集落跡散布地と、古瓦散布が認められる場合が多く、乗附町護国神社、寺尾町茶白山、同永福寺、同館、同左近屋敷な、廃寺跡と思われる遺跡が続いて存在し、吉井町南接丘陵、藤岡市北東部の丘陵地帯中の古瓦散布地とその数の多さは共通し、独特な寺院分布地帯の一つとしてあげられる。
- 8 鹿島神社散布地…塔の石製露盤(上総大寺廃寺に類例あり)、出柄礎石などが存在し、本格的仏堂の存在が示唆され、多胡郡建郡後の片岡寺(郡寺)の推定もある。
- 9・10・11 馬庭東廃寺、岡廃寺・宮ノ西散布地、雑木味散布地…雑木味散布地が周辺地で一番瓦散布が濃いため、多胡郡衙の可能性がもたれ、多胡碑がかつてその地に存在した可能性も考える必要があり、雑木味散布地から馬庭東廃寺は東方延長線上にあつて、多胡寺(郡寺)の推定も無理ではない。
- 12 桑原峰散布地…丘陵頂部に造られた、西上野における初期の瓦葺小堂宇が推測される。すなわち長い有段をなす三重弧文字瓦があり、西上野地域最古の古瓦散布地の一つと考えられる。
- 13 浄法寺遺跡…古代から中世、現代にまで法燈は、ほぼ現寺域および、直接の隣地において続いていたと考えられるようになった。
- 14 東谷津(支群)窟跡…山の上碑銘文に見える天武天皇681年の放光寺(山王廃寺)を頂点とする連合体の官衙、寺院などに用いられた複弁七葉蓮華文鏡瓦焼造に関わる窟跡群で、上野

国古代史上必要欠くことのできない遺存状態良好な重要遺跡である。現状のまま放置されれば遠からず破壊につながる地域にあり、早急な善後策を切望する。

- 15 小塚窯跡…9世紀初頭頃における国分寺供給の瓦生産を伴い注目される。この観音山丘陵には他にも数多くの窯址存在が予測されているが、山崎義雄「岩平村岩崎の陶窯址に就て」『上毛及び、上毛人5-6』（1930）において窯体が2基以上確認されているのと、つぎによる「でえせえじ」（窯跡か）が公表されているのみである。
- 16 でえせえじ散布地…窯跡存在の可能性が大である。実体は更なる追及により補完を期す。などの内容を上げることができるが、むしろ、今後に与えられた課題はより重大であり、それをつぎにあげる。
 - 1、本稿で紹介した遺跡や遺物類は僅か氷山の一角でしかない。
 - 2、地域環境が大きく変貌しつつある今日、遺跡調査の原点でもある表面採集踏査（遺跡分布調査）行動も将来的展望の中では、現時点においてその時期を失する虞れがでてきている。
 - 3、群馬県下において、古代に存在した神社、寺院、仏堂など今日に継がれている要素についての見直しと、それについての追及の必要性を強く感じた。

上記による第1点は、本稿の筋においた西上野という広大な地域の中で紹介し得たのは僅かに17カ所の点にしかすぎない。例を榛名連峰においた場合、筆者の走破圏は目的の1/100にしも充たない微々たる範囲である。それでも、神社、寺院、仏堂跡、瓦類など、限定した目的意識をもった長年の活動の中から、本稿において紹介したような成果が見られたのであって、踏査活動に終わりはない。

第2点については、前述の通りであるが、近年では安中市、桐生市の各教育委員会文化財担当者により遺跡の分布調査が行われ著々とした成果をあげられている。しかし環境は日進月歩で変貌しており、1回のみ分布調査に終始することなく、現地100回の信念による調査継続を期待する。

第3点は、前項の水沢庵寺、唐松庵寺、里見庵寺、浄法寺遺跡など、遺物による前代寺院の廃年代と、文献・縁起による現寺院創建年代の類推を重ねることに、解明の糸口が存在する。

以上、20余年の踏査活動のから得た成果と考え方を披露してきたが、悪しきについては今後補完することによりその責を全うしたいと考えている。

終わりにりましたが、本稿を草するに当たり、群馬県教育委員会文化財保護課、安中市教育委員会文化財課、田島伊作（安中市民俗資料館館長）、救世真教さわか会（会長新井三知夫）と会員の皆さん、緑野智天（浄法寺住職）、吉田剛義（榛名町中里見田農園）、斎藤勲（箕郷町生原字中内出）、高橋光由（高崎市寺尾町小塚）、河原勝雄（吉井町池字岡）、町田利夫（吉井町馬庭）、群馬県埋蔵文化財調査事業団の皆さんから資料提供及び、御教示、御助言、御助力を頂きました。記して謝意を表します（順不同）。

註

- (1) 『關東古瓦研究会・研究資料』1 (群馬歴史考古同人会 1981)、『同前』3 (群馬歴史考古同人会 1982)
- (2) 『土器部会研究資料』1 (群馬歴史考古同人会 1982)
- (3) 川原嘉久治「延喜式内社上野國標名神社遺跡をめぐって 一嚴島寺の故地を求めて一」(『研究紀要』8 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991)において詳述を行った。
- (4) 尾崎喜左雄『伊香保神社の研究』(『上野國の信仰と文化』尾崎先生著作刊行会 1970 所収)
- (5) 大江正行『田端庵寺の推定』(『田端遺跡』第5分冊 上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書 第9集 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988)
- ※ 大江正行『有馬庵寺跡』第田章考察編 渋川市発掘調査報告書第16集 渋川市教育委員会 1988)
- ※ 木津博明「カラウの世界 一群馬古代史の実状一」(『群馬風土誌』1991 5月号-12月号)
- (6) 森田秀策『八重巻塚跡』(『安中市誌』(安中市史編さん委員会 1964 所収)
- (7) 安居院編『神道集』正平七年~十五年(1352~60)頃成立 (近藤喜博編『神道集』1944) 所収
- (8) 川原嘉久治「上野國總社神社主祭神の性格に関する一考察」(『研究紀要』6 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989) 標名神社主祭神「越山姫命・火産靈命(初期祭神奇稻田姫神か)」による。
- (9) 大江正行氏の御教示による。
- 00 前掲註8所載。
- 01 1992年4月下旬の実測作業により確認した。地権者である「教世真教さわか会」では、1969年の聖地造成工事の際、偶然に発見された遺物類すべてが、発見当時のまま保管されており、埋没当時に近い状況まで目に観察できた。
- 02 水沢庵寺の項を参照されたい。本来はここにおいて注釈を加える必要がある。しかし本遺跡において収集した史・資料、情報量は膨大で、そのすべてを本項に供することは不可能である。したがって筆者の立場において次号での草稿により全容を明らかにすることで責を全うしたい。
- 03 『上野國神名帳』(總社神社所蔵本) 奥書に永仁六年(1298)の書写文あり
- 04 大江正行・川原嘉久治「天代瓦室遺跡の存在意義をめぐって」(『天代瓦室遺跡』吾妻郡中之条町教育委員会 1982)
- 05 尾崎喜左雄『上代・中世』(『勢多郡誌』勢多郡誌編纂委員会 1958)
- 06 高崎市下豊岡町から秋間丘陵へと続く緩傾斜の台地は途中に若田古城跡などを擁している。この台地上の北端を、一本の古道が通る。台地の北側下を通る東道高崎一線名一中之条線と、さらにその北側に位置する部落群を結ぶように走る旧信州街道と並行する古道は「吉信州街道」と称され、高崎市引間町から標名町下風見へ至り、下風見から風見台地へと移り、風見庵寺の南辺を抜けて上風見上神から倉洞村へ至る古道で、原街道・標名草津道・吉信州街道などと呼ばれている。
- 07 本稿に關係する塚跡と考えられた図面が、『里見村誌』(里見村誌編纂委員会 1955)に掲載されている(第158頁)。
- 08 尾崎喜左雄『上野國上代寺院についての問題』(『史学会報』第三輯 群馬県編年男子部史学会 1949)により、古代寺院址であることが指摘されている。礎石第21圓、石製靈櫃同圓は1987年筆者による実測図。
- 09 『史跡上野國分寺発掘調査概報』5 (群馬県教育委員会)における、前沢和之氏の指摘がある。
- 00 前掲註5) 大江正行氏論の註脚による。
- 01 1992年6月の現地踏査補足時の現状による(吉井町教育委員会へ通報)。なお付近には、殿治田の地名があり、水田下層の一部から鉄分を含んだ赤色の水が泌み出ている道跡などへの関連も窺える。
- 02 『吉井町誌』歴史編-原始から古代へ-(吉井町教育委員会 1974)
- 03 前掲註00
- 04 源順撰『和名類聚抄』承平七年(937)頃成立。(正宗教夫校訂『和名類聚抄』1974)
- 05 前掲註03
- 06 『多胡村誌』(『上野國郡村誌』7 多野郡 明治15年(1882)完成 群馬県文化事業振興会 1980) 本郷村字名の項に「三角 東西百三十五間 南北九十五間」とあり、池村字御門の地名面積には及ばないが、地名三角の音・訓説とその変遷を辿りたいものである。
- 07 富田永世輯録『上野名跡誌』初編ノ上「多胡郡」(明治15年(1882)刊)所載の「多胡碑」項による。
- 08 『秦原遺跡群』(秦原遺跡調査会 富岡市教育委員会 1987)によると、同報告書には本敷布地の記載は見られない。
- 09 千田孝明「輪王寺の大般若経について-応永三年十月十八日の一日頃の写経の成立をめぐって-」(『栃木県立博物館紀要』第5号 栃木県立博物館 1988)による。
- 00 昭和32年(1957)7月群馬大学により発掘調査が行われているが詳細不明。したがって前掲註6)による。
- 01 長元三年(1030)成立。「九条家本延喜式紙背」(『群馬風土誌』史料編4 群馬県史編さん委員会 1985)所収。
- 02 この遊瓦は、現地を訪れた高崎市内在住の蒐集家の手に渡っている。
- 03 未発表品である。本稿関係では、小塚塚跡の採集品の掲載にはじまり、栗野庵寺、浄法寺遺跡の項に掲載したが、本文掲載のように図分僧寺・尼寺の発掘調査出土例にも散見される。近年は、発掘調査により徐々にではあるが増加する傾向にあり、いずれは総合的な検討が加えられるであろう。
- 04 農作業中の地元民の話によった。
- 05 本稿の図面作製にあたって、既出例の瓦当瓦類については、住谷 修編『上野瓦集』(西毛編)(1980)によった。

研究紀要 10

平成4年10月30日発行

編集 財団 群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行 法人 群馬県勢多郡北橋村下箱田784-2
Tel (0279) 52-2511

印刷 朝日印刷工業株式会社

BULLETIN OF PUBLIC CORPORATION FOR ARCHAEOLOGICAL OPERATIONS OF GUNMA X

CONTENTS

- The Changing Processes of Spearpoints
 — Manufacture and Disuse Processes of Spearpoints in Sagamino Terrace —
 by SEKIGUCHI Hiroyuki (1)
- Some Phase of Pottery from the End of the Initial to the Beginning of the Early Jomon in Gunma
 by FUJIMAKI Yukio (27)
- Settlements During Later Phase of Early Jomon in Gunma Prefecture
 — Focused on Moroiso b₃ ~ c Period —
 by KIMURA Osamu (63)
- Hearths or ovens
 — The Other Structure of Ovens —
 by TOYAMA Masako (89)
- An Analysis of How A Group of Tumulus Mounds Were Formed at the Southern Foot of Mt. Akagi
 — Chiefly on Kaninuma-higashi Tumulus Mound in Iseaki, Gunma —
 by SHIKADA Takemitsu (107)
- A Trend on Native History Researcher of Gunma Prefecture in Early Showa
 — Background for Archaeological Operation of Kamisiba Tumulus in Kouzuke Minowa Town —
 by KISIDA Haruo (131)
- Fundamental Examination of Decorated Swords in Kouzuke Area
 by TOKUE Hideo (161)
- The Kozukenokuni Yogyo Kou Vol. 1
 — Study about the Ceramics in Kouzukenokuni (Gunma Prt.) —
 This is study about quantitative of craies and arames by Xrai.
 by KIZU Hiroaki (197)
- Study about the ASIKANAMO NO (the Hard Ware which Attach a KATANA to the Sash
 by Striging) which Excavation from Kamikurusu Site in Fujioka-city
 by SAITOH Toshiaki, KIZU Hiroaki (231)
- Study of Kapara's Sites in West'ern Part of Kouzuke
 by KAWAHARA Kakuji (237)

PUBLIC CORPORATIONS FOR ARCHAEOLOGICAL OPERATIONS OF GUNMA

Oct. 1995

01-350 / 6 / 10(5)



0135000080001000 05



財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団